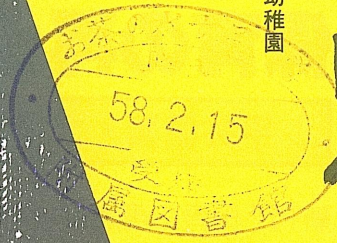


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教玄月



第八十二卷第三号
日本幼稚園協会

3

新刊案内

保育の再点検(全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

新刊「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

①望ましい生活習慣

②望ましい集団づくり

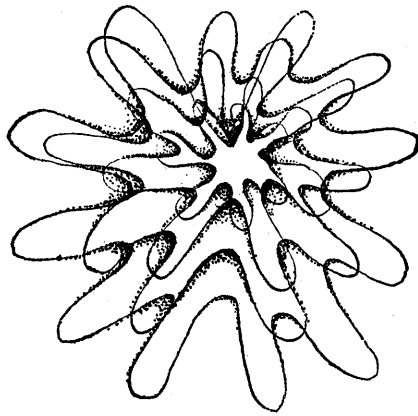
③望ましい当番活動

④望ましい行事と生活

⑤望ましい言葉の指導

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価 6,750円

幼児の教育



第八十二卷 第三号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第八十二卷 三月号 —

© 1983

日本幼稚園協会

「法」は絶対ならず

— 幼保一元化をめぐる — …… 日名子太郎 …… (4)

☆特集 私の園の卒園式 …… 折原祥子 …… (6)

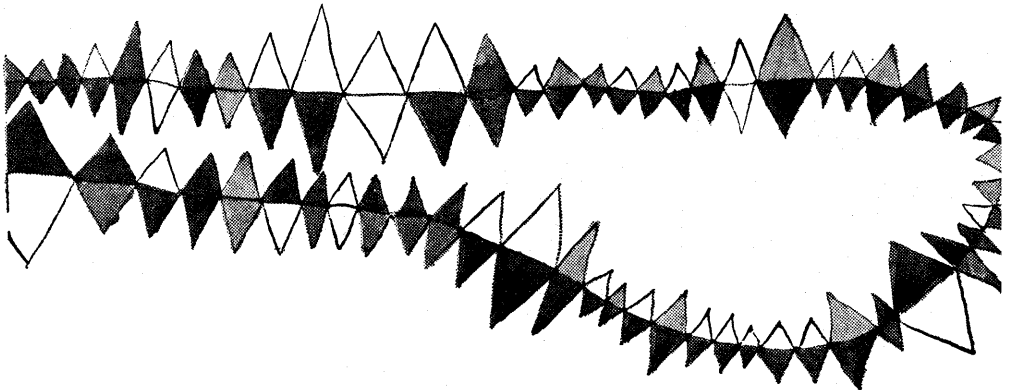
水藤昭子 …… (9)

金子房子 …… (13)

水沼昭子 …… (16)

野辺繁子 …… (19)

小坂田玲子 …… (23)



冬の日の保育

——雪とHちゃん——……………田村満紀子…(25)

エリックソンと幼児教育 (15)……………仁科弥生…(28)

本音と建て前……………永井正子…(38)

ブリュエールの「子供の遊戯」(10)

——「ボール遊び」から「穴の中へ」まで——

……………森洋子…(40)

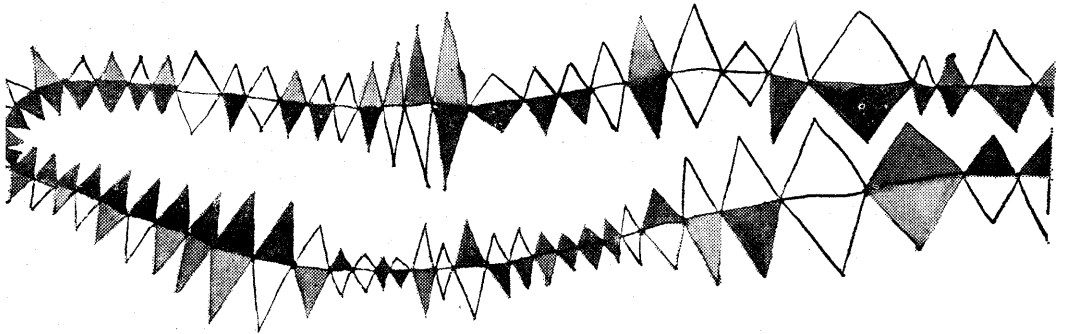
☆倉橋賞受賞論文

保育所における大型遊具の遊びの研究

——三歳未満児のための大型室内遊具——

……………福岡貞子・上月素子…(55)

表紙 織茂 恭子
表紙題字 比田井和子
カット 福田 理恵



「法」は絶対ならず

— 幼保一元化をめぐる —



日ひ名な子こ太た郎ろう

昭和五十年以降におけるわが国の出生数は、毎年六乃至七万人ずつ減り続けており、今後少なくとも昭和六十年頃までは全く回復の兆の見えないことを人口動態統計、推計は示している。これに伴って、当然のことながら、幼稚園・保育所などへの入園児数は年々少なくなり、地域により多少の差はあっても、全体として、園児数が減ったことは否定できない。その為もあって、幼稚園・保育所ともに夫々の立場において園児確保に鋭意努力していることはいうまでもない。しかし、これは幼保何れの場合においても、私立の園のみでの現象であって公立園では、未だそれ程の問題ではなく、一部に園の合併といったことの必要が論じられている程度である。このような幼保夫々の立場からの

園児確保乃至獲得対策は、その結果として、実にさまざまな形態的变化を幼稚園・保育所に与えつつあることは論をまたない。巷には、幼稚園経営対策のいわゆる三種の神器として、長時間保育、給食、スクールバスという三つの手段があるなども伝えられている。私立幼稚園は、民間保育所と比較した場合、全体として国家、市町村団体などからの助成は少ないが、その反面、経営における自由度は、保育所よりずっと大きいから、ある程度までは、園児獲得の対策において経営者自身の裁量によるものが可能である。したがって、前述のような三種の神器的処置が仮りとられたとしても、それは、決して不自然ではない。これに比して、保育所は、その設立主体が民間であったとして

も、經營的に見れば、いわば半官半民のようなもので、幼稚園に比して自由度ははるかに低く、相当なところまで行政の介入を容認せざるを得ない経営体である。その中心を為すものが、いわゆる「措置制度」である。戦後、児童福祉法の公布、実施に伴って、措置制と階層制は、一時的には保育制度の育成に実に大きな成果をあげ得たことは否定できない。しかし、反面措置制によって保育所が、その自由を奪われ、完全に行政当局の管轄下になり、民間立といつても、まるで公立のような経営のあり方をせざるを得ないこと自体が、今は、社会の要求の多様化に伴なり保育所の変革を妨げている点を無視してはならないであろう。

長時間的保育、0歳児保育、統合保育など、近年、保育所に対するいろいろな要求は、婦人労働者数の増加、婦人の社会的意識の向上と経済不況の強まるに連れて益々激しくなりつつあるが、その何れの問題をとりあげても、保育所側に対処する意志はあっても、兎角、行政当局の画一的、硬直的姿勢が原因して、少しも問題の解決に進展が見られない上、中央官庁と地方行政当局との見解の不統一なども多く見られ、保育所自体は、そのしめつけに四苦八苦

しているのが今日の実情である。

さて、このような背景の下に、幼保の一元化論争が盛んであるが、どの論議も、その殆んどが、何れも学校教育法による幼稚園の教育性と、児童福祉法による保育所の福祉性ばかりを真正面に押し出している論争である為、はじめから平行線を辿って了っている。この二法は、何れも戦後のあの混乱の時代に生れた法律であり、それから三十有余年の歳月―しかも激動の期間―を経ており、今日の実情に適さない面が生じたとしてもあながち不思議ではない。「法」といっても、それは所詮、人間が考え、作り出したものにとすぎないのであって、それを金科玉条不変のものとして移り変りいく社会の変動に対処しようとすること自体が問題である。すべての「法」の源となっている日本国憲法でさえ、その変革が云々される時代の動きを勘案した時、幼保一元化論争は、もつと子どもを中心に「法」を抜きにして論議は出発すべきである。「法」は、絶対のものではないことを、行政当局は勿論、幼保の当事者も深く認識すべきである。

(玉川大学)

私の園の卒園式

折原祥子

卒園式の前夜、黄色のフリージアの花を束ね、明日胸につける子供達の顔を思い浮かべながらコサージュ作りをする。

卒園式の朝、子供達はいつもよりちょっと緊張した表情で登園して来る。毎日着て遊んだ園児服にはいつもより丁寧にアイロンがかけられ、頭にはリボンなどがつけられ、顔はにこにこしている。いつもよりちょっとおしゃべりをし、玄関でコサージュをつけてもらい、さらに主役的要素が強まる。

子供達には、卒園式とはどのように受け取められているのだろうか。

今日で幼稚園とはお別れなのだという事も分っている。しかし、別れるという寂しさよりも、新しいものに向う希望でいっぱいなのではないだろうか。卒園式も近くなった頃、いや、秋に行われる健康診断、お正月、ラ

ンドセルを買ってもらった、と少しずつ入学への期待がふくらんでいく。そしていよいよ明日からは小学生なのだという嬉しさでいっぱいなのではないだろうか。子供達の顔は晴れやかである。

それに比べて母親は、今日でお別れなのだと感傷的になったり、子供の成長した姿を前に嬉しさと緊張で涙を拭きながら見守っている。「こんなに大きくなって。」という気持ちこそうさせるのであろう。

私達教師はどうだろうか。

子供達ひとりひとりいろいろな事が浮んで来る。口から生まれたようにおしゃべりで困らせたけど、お話が好きで気の良いつちゃん、お姫様のスカートとベールが好きで、ままごとの主のようだったひろみちゃん、お弁当を食べるのに苦労していたひろあきくん、等いろいろな事を通してようやくひとりひとりの気持ちと通じあえたのに、とその成長ぶりを思い、明日からいなくなってしまうと思うと、寂しい気持ちで泣きたくなる。

子供には、「先生も一緒に学校に行こうよ。」「先生学校に行ったら幼稚園のお友達が困るじゃない。」「いつも

学校の帰りに遊びに来てあげる。」などと慰められ、毎年おいていかれるのである。めそめそしないで、「頑張つて大きくなってね。」といつもの調子で元気に笑つて送り出そうと思うのだが顔は歪んでしまう。そんな気持ちでそれぞれが参加するのが卒園式なのではないだろうか。

私の園は、今年十六回目の卒園式を迎えるのであるが、改めて報告するような特別な事もなく、ごくあたりまえに毎年行われる。

型も考え方も開園時より変わらず、子供達ひとりひとりの成長を皆でお祝いし、一緒に遊んだ小さいお友達、先生、見守って下さった父母が参加し、毎日過した幼稚園とお別れをする、子供達中心の式である。

式の内容は下記のような順序で、キリスト教主義のため礼拝形式で行われ四〇分位で終わる。

式のための練習はあまりしていない。歌い慣れた讚美歌を選び、卒業の歌を入れ、お別れのことばの順序を合わせるために、全員でする練習は二回程である。証書の受け取り方も、各自その子らしい受け取り方で良いと思

式 順 序

卒園児入場

奏楽

さんびか(小さいときから)

聖句 卒園児

おいのり

さんびか(主に従いゆくは)

おはなし 園長先生

お別れのことば 卒園児

在園児

さんびか(つくしのように)

証書授与

記念品授与

卒業の歌 全園児

あいさつ 母代表

後奏

卒園児退場

(五十七年三月十九日十五回卒園式より)

うので、形にはこだわらない。しかし子供達は「先生証書もらうの練習しようよ。」と何故かやりたがる。

お別れのことばは三月の始め頃各クラスで話し合われる。「楽しかったこと。」「うれしかったこと。」「いちばん覚えていたこと。」「一年生になったらどんな事したい?」「おおきくなったら……。」「ことりぐみ、りすぐみさんに何かいいたいことある?」「卒園するぞうぐみさんにどんなこと云ってあげたい?」等……。ひとりずつから出て来たことばの中で、いちばんその子らしいのを選んでつなぎ合わせて行く、先生と子供の共同作業である。

卒園児は毎年三十名前後であるから、全員がひとこと云えるように、年中、年少児はグループで、組み立てていく。子供達は、自分の話したい事を受持つので張りきって話す。ことばも自分で自由にえらぶので話しやすいようだ。ある年などは当日急に違う話が出て来て驚かさされた事もある。

ある年のお別れのことばをみると、

。お砂場でお山をたくさん作りましたね。(年少)

。多摩動物園の遠足で、らいおんがのっしのっし歩いていたのがおもしろかった。(ますみ)

。私は子供の家でおばけごっこをしたのが楽しかったです。(ようこ)

。ぼくはドッジボールがとってもすきでした。(おさむ)

。ぼくは大きくなったら、おもちゃがすきだから、おもちゃ屋さんになりたいです。(まもる)

。一年生になったら一生懸命勉強します。(しおり)

。私はやさしい人になりたいです。(じゅんこ)

。学校にいてもがんばってね。(年中)

。ことりさん、りすさん、小さいお友達に親切にしてあげてね。(ゆみこ)

等……このようなものである。

証書については、もう少し良いものはないかと思いつつ市販のものを利用している。名前生年月日等、昔ながらの毛筆で書き入れ、印を押し準備する。

証書を書く時は、音楽の流れる中、一人ずつ名前を呼ばれ、園長先生より「おめでとう」と云われ、「どうも

ありがとう」と緊張の中にもうれしそうに、又皆からの拍手に照れながら、各自、自分らしい歩き方で席につく。卒園記念には、自分の描いた絵を表紙にしたアルバムを作り贈られる。園生活の思い出の写真をはって、大切に皆持っているようだ。お母様の挨拶も代表の方にお願いするのだが、毎年決ったようなことばになってしまいうので、今年は、卒園の時にお母様方の気持ちを文章にして頂き文集にしているものの中から、何人かの方に読んで頂く事を考えている。特別工夫してこんな事を、と云うのもない私の園の卒園式だが、春の花に囲まれ、暖かい雰囲気、日頃の保育の姿がそのまま見えるような最後の日にしたいと願っている。

(神奈川県・松ヶ丘幼児園)



私の園の卒業式

水藤 昭子

私達の保育園は、宗教法人(日本聖公会中部教区上田聖ミカエル及諸天使教会)で、教会の敷地にある古い建物を利用して、四〇年の歴史を持っています。

市の中央部にあり、隣接して幼稚園や保育園が五つ程固まって在りますので、思い切って、九〇名の定員を、六〇名にいたしました。人数が少なくなりますと、今までとはまた異なった生活が生まれてくると思われすが、現在までの卒業式は、大体次のとおりです。

子供達がいただく証書には、

“あなたは、神さまのみまもりのもとに、本園にて□年間、保育を受けたことを証します”

と、記されていて、写真がはってあります。それは縦一六糎と、横二六糎の小型の物で、厚いしっかりした紙質で出来ています。写真はその左端にはってあるのですが、その写真は保母が写すものですから、その子供の表

情の一番すばらしいものの一枚を探し出すために、何枚も写すことになってしまいます。

式次第は、聖歌とお祈りとみことばによるもので、毎年殆んど同じです。

式の練習は、毎日の保育の中で、順次に身につけてゆくものだと思います。歩き方も、物を受ける時の態度、人とお話をする時の態度、それらは在園中に、生活の中で身につけてゆくべきことなので、練習を機会に、もう一度確かめてみる事が出来ます。この式の中で、ローソクに点火するということが、一番緊張する場面です。

ともされたローソクの光をみまもりながら、まっすぐに目的のところまで歩いてゆく、ということは、子供にとっては、とても大変なことと思われまますので、自然な行動となる為に、三月になると、一週に一度の割で、練習をします。

これらの内容をもつ卒業式の案内状は、毎年似たりよつたりなのですが、昨年度のものを記してみますと左の通りです。

*

*

暖かな春の日射しに、垣根の葎が開花し子供達の喜びの音が、庭いっぱいに溢れる今日この頃でございます。

この庭で四年、或いは三年、二年、一年と、期間の差こそあれ、共に主を讚美しつつ成長してまいりました子供達が三〇名、小学校へと出かけてゆく日も近づいてまいりました。

子供たちは、どこにあっても、平和を創り出してゆくことに心を用い、光を放って進んでゆくことと思えます。その歩みが、確かなものとされ、日々を過ごしてゆけますように、神のみもとと平安をお祈りしております。

この子等の成長を祝い、別紙のように卒業式をとりおこないますので、どうぞ皆さま御出席くださいませ。

*

*

また、卒業生氏名と、保育年数とを記した式次第も、すべて、園で印刷した質素なものです。

卒業式では、二才三才の子供達が喜びを感じるよう

に、祝いの気分の中で成長してゆく事が出来、喜んで参加出来るように心を配ります。

そこで、それより十日程前に卒業生だけで、父母を招待して「卒業感謝礼拝と劇」という特別な行事を、一日もうけることにしました。それからすでに十五年になるでしょうが、一番最初に、これを共に計画した子供達は、現在二十一才になります。（大学三年）

最初は、簡単な童話劇でしたが、七年前から「十字架のみちゆきと復活」という大きな劇になりました。これは現在六年生になる子供達の願いから始まったものですが、年毎に子供達の期待が大きくなってゆきます。

年長児に年中児も交っているクラスですが、一人が四役程をいたしますので、舞台裏での衣装の着がえなども、全部一人ですということ、耳をすまして、舞台の動きを聞くということ、出番が来たら自分で出て来るなど、各自が主体性をもち助け合つてこの劇にのぞみますので、結果として子供達一人一人が、自信に満ちた輝やくような表情をしております。所要時間は一時間と二〇分程で、舞台は非常に広く、舞台裏での静肅をまもる約

束など大変です。

でもお母さま方に見て戴く日には、子供はまた一段と成長して、しっかりと活動を展開しています。

この日は、ただこの劇だけに終始するのではなく、その前に、卒業感謝礼拝を行ないます。

その礼拝の為に、前日は聖堂の掃除を子供達と一緒にいたします。この聖堂は、檜ひのきで出来た、明かるい暖かな日本建築で、広い聖堂の雑巾がけは、子供達の楽しみにしていることの一つです。自分の隣りにお母さんが坐る、そのために祈禱書や聖歌を揃える。そのような準備もあつての親子礼拝ですから、子供達はお客様として家族を迎え、礼拝の間も、むしろ子供達がリードして、聖公会の礼拝を進めてゆきます。

また、その日は講師をお招きしてお話を伺うのですが、子供達には、特別なことではなく、大変ゆつたりとした気分で、教会の椅子にこちよげに腰かけて、お話を聞いています。

そうした礼拝のあと、ひき続き子供達は、それぞれの位置につき劇をしてお母さんを感動の世界に伴って行くの

です。大仕事の済んだあとの昼食は毎年、格別においしく感じられます。グループで食卓を整え、お母さんと共に席につき、食前の感謝のお祈りも、準備の出来たグループから、順次にはじめて「ごちそうさま」まで、そのグループの活動が続きます。

昼食のあと、子供達はそれぞれに楽しい遊びにおやつまでを過ごしますが、お母さん達は、続いて作業をいたします。

宣教師館の一室にこもって、保母の声を聞きながら、聖書のあちらこちらに線引きをしてゆくのです。それは、子供達の愛誦聖句とでも申しませうか。「光の子らしく歩きなさい」や「互いに愛し合いなさい」と入園当初覚えたみことばからずっと、卒業する日まで、子供達が口ずさんで来た沢山のみことば、そこに赤い線をつけてゆくのです。

マタイによる福音書のヨセフの話からヨハネ黙示録まで、相当なスピードで朗読して、二時間はかかる線引きです。「ああ、これはここにあったのか」とか「聖書をはじめから終りまで見たのは、はじめて」とか、その時

間が進行するにつれて熱気が感じられます。

この聖書は、聖書協会から出されている一番安価な新約で、一冊一冊、母親の手に暖められて、尊い記念品となります。そして卒業式で、この聖書を贈られるわけですが、それはもはやどこにもない、貴重な新約聖書です。

お母さん方と線引きをしたあと、一緒に「主の祈り」を捧げる時、魂の最も深い所にひびきわたるよろこびを経験いたします。

保育室から「たそがれの空暮れてゆきて 花も小鳥も眠るなり 天っ使いのつばさにて われらの眠りまもりませ 父、子、みたまのわが神に 世々限りなく栄えあれ、アーメン」と帰宅の前の聖歌が流れ、感動を胸に、帰つてゆく母子を見送り、卒業式までの残る一週間の生活に、最善を尽くしてゆけることを祈るのです。

(上田市・聖ミカエル保育園)

修了式を考えて

金子 房子

本園は一年保育なので、修了式は子供達の育ちの一年間の課程を修したことになります。

私の園では、教育目標の達成の日が修了式であり、この日にむけて、子供達も、先生も保護者も、園生活の中でいろいろな経験や体験を通して小さながんばりを積み重ねてまいりました。

そのようなことから、修了式はその年度の子供達の姿に応じて「ねらい」もいく分変わり、行う方法も変わってまいります。

修了式を迎える一か月位前に職員全員で子供達の一人一人の育ち具合を話し合い、幼稚園生活のしめくくりをどう過させてあげたいか話し合います。次に、では本年度の修了式はどのような「ねらい」で挙行しようか方法等を相談いたします。

私は若い先生方がもっている若い感覚や創意を生かし

たい、一人一人の子供の心の片隅に暖かい、ほのぼのとした思い出を作ってあげたい、保護者にも子供の一つの成長の過程の思い出としてもてるように等々、夢はたくさんあります。しかし修了式のその場でしか味わうことの出来ないこともあるのではないかと考えたり、いろいろな方面から話し合った結果、次のような願いをもって昨年度は修了式を挙行しようと決めました。

1、意外なことに若い先生から、自分の学生時代の卒業式を思い返し、厳かな雰囲気をもつことが必要なこと
の意見がでた。

2、小さい子供達でも、緊張して身がひきしまる経験もさせることも必要ではないか。誇らしい気持をいだけせることも味わわせたい。何か一つの目標をやり遂げた成功感・満足感をもたせることを通して、小学校へ入学する自信と期待感につなげていきたい。

3、式の方法として、一人一人の子供がはっきりとした存在感をもてるような進め方にしたい。そのために、園長の手から一人ずつ修了証書を授与する、入退場、

お別れのことば等で一人ずつの子供がはっきりと表現

できるような工夫やアイデアを折り込んでいきたい。

4、式場の設定も式花に至るまで細心の配慮をして明るく暖かいものにしていきたい。更に歌や音楽も精選して雰囲気をもり上げていきたい。

以上が先生達の願いでした。私といたしましては、これからの幼稚園教育を担う若い先生の意見がこのような愛情こもった考えをもっていることに喜び、大賛成したのです。

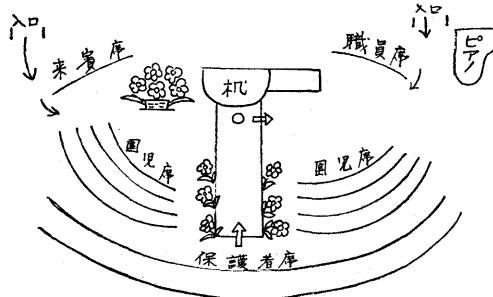
次に式次第ですが、これは他園と同じようなものと考えております。

昭和〇年度 保育修了証書授与式次第

- 一、おじぎ
- 一、君が代
- 一、保育修了証書授与
- 一、園長のはなし
- 一、お祝いのことば（来賓）
- 一、お別れのことば
- 一、修了のうた
- 一、おじぎ

以上

修了式場作りについて



○ 式花は、愛しい花を丈を低くしける。(スピーチ)

修了式当日の状況について

- (1) 式の始まる前に、来賓、保護者が着席
- (2) 園児が「修了のうた」〜さくらの蕾がふくらんで〜と元気に手をふり大きな声で歌いながら、一小節毎に左右の入口からクラス毎に一名ずつ入場し着席す

る。一人ずつ園児を祝す気持で保護者が拍手をもつて迎える。

(3)ピアノにあわせておじぎをし式は始まる。

(4)次に「君が代」を保護者を中心に歌う。

(5)一人ずつ名前を呼ばれると元気に返事をして中央の台に進み園長より修了証書を受ける。園長は一人ずつ、顔をしっかりとみても「おめでとう」と祝すことばをかける。保護者の方を向いて証書を受けたことを報告するように見せる。その時にはどの親も感激に涙し、拍手が湧く。修了証書授与中にはバックミュージックとしてサンサーンスの白鳥の曲を流す。

(5)園長のはなしは子供達の印象に残るような一言をしていただく。保護者にも一年間の成長のよろこびと園への協力の感謝のことばをいわれた。

(6)お祝いのことばは、お客さま全員に短かく「おめでとう。よくやったね。よかったね」程度の心のこもったことばをいただく。

(7)お別れのことばは、始めに全員で歌「思い出のアルバム」の一番を歌い、一人ずつ立って園生活で自分

の一番楽しかったこと思い出深かったことを入園から修了までのことを自分で考えて友達や先生、保護者に語るように話す。内容は修了式に至る日まで次第に変わってきた。全員が話し終るとみんな考えた決意のことばを全員で声をそろえていい「思い出のアルバム」の六番を歌う。

(8)修了のうたはみんな一生けんめい歌うように指導してきた。年少児がいないために「春の光が照っている」一番はおかあさんが歌う。いおにいさま方のところにクラスの名前を入れる。二・三番は間奏を入れて言葉の意味をよく解って歌う。

(9)終わりのおじぎは終了までしっかりとやるというやうくそくから特に指導している。

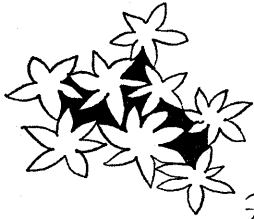
(10)退場は入場と逆に「一年生になったら」の歌を胸に証書をかかえて元気一杯、来賓や保護者の拍手に送られて退場する。

以上、概略ですが来賓も保護者も、とても心のこもった、思い出深い修了式といわれました。

どちらの園でも、それほどの違いのない性格をもった

行事である修了式でございますが毎年、園の教育内容の充実を図った結果が何か修了式に表現されるのではないかと考えています。また、教育機器を活用して、スライド、OHP、ビデオ等を組み入れる、曲の選択を考慮する等多くの課題が残されています。

毎年のことです。修了式が終り、子供達を送り出すと、この子供達が二十一世紀には社会人として活躍するであろうと考えるときに、人間の基礎作りをしっかりと身につけさせることができたらうかと教師として反省いたします。私は先生方と共に反省をし、そして次年度への情熱をいただき、決意をかたくいたします。そろそろ「本年度はどんな修了式にしましょうか」と職員間で話が出る時期となつてまいりました。



(大田区立矢口幼稚園)

私の園の卒園式

水 沼 昭 子

「子ども達にとって卒園式とは——」私たちの園では保育活動を展開する時、大事に考えていることは、なぜ、そうするのか」の発想です。特に行事(運動会にしろ、合宿保育にしろ、何でも)を前にして「子ども達に何をさせるか」ばかりが考えられがちですが、まず、「なぜ、それをさせるのか」を問う事から始めます。ですから、その「なぜ」の問いによって、前年とは、まったく違う展開の「行事」がくりひろげられます。毎年、園生活を創り出す子どものタイプも、構成メンバーも、さらにそれを取り巻く自然界も異なる中で、幼稚園の行事が毎年同じである事は、むしろおかしい様に思えます。決して伝統や形式を軽んじての発想ではありません。むしろ、「なぜ」の問い直しの結果、伝統が継統されて行く事がないのぞましいと思うのです。そうした考え方を踏まえて「私の園の卒園式」があるわけです。

卒園式が別れの式と云う考え方は幼児には縁遠いように思え、一年生になるお祝いの式と云う考え方を基本として私達は持っています。「あんなに幼なかったのに今はこんなに大きくなった」「すごいね」と云った成長の喜びはどの子にもあります。「どのような成長でなければならぬ」のではなく、その子の歩いて来た二年なり三年の園生活の中にある「その子」の成長を喜んでやれる卒園式をくりひろげたいと願っています。ですから、卒園式当日だけでなく、それ以前から保育活動の中に、「その子」の成長が伝わる様なプログラムを加えます。「赤ちゃん写真展」などはその大きい部分です。また、一番好きな遊びを皆でする日、一番おいしかったお弁当をお家の方にも作ってもらって食べる日……etc. 卒園式の練習などに費やす時間を、そうした子ども達の「幼児期」の思いを燃焼させてやりたいと考えています。そして、その大きい山が「卒園式」になる——そう考えて毎年「卒園式」を迎えています。

● 卒園式のプログラム

毎週一度行なって来た「礼拝」その最後のものとし

て卒園式は、卒園礼拝として行ないます。改めて、特別なプログラムを組むことはしていません。礼拝の中に「保育証書を贈る式」が加わります。園長の説教、先生方のお祈り、皆でうたう讃美歌、いつもの礼拝そのままだの中に、いつもとは違う気持、雰囲気が生れる——決して押し付けたものでない緊張感が成長を感じさせます。卒園礼拝を一部と考えるならば二部は「お祝いの集い」として行ないます。短い休憩の時を置いて、子ども達が再び会場に入場して来ます。この会も、その年毎に展開は異なりますが、「一年生になる喜び」を贈ってやりたいと云う願いで計画を立てます。「プチ・コンサート」を行なった年もあります。先生方のピアノや、ホルン、縦笛、歌などのコンサートでした。また、ある年は、子ども達の園生活のトピックスを披露する会であったり、さらに、ここでお祝いのことばを贈っていたいくともします。私達の園では、お祝いに来て下さるお客様、いわゆる来賓は、出来るだけ子ども達の生活に関係のある方々をお招きします。進学する小学校の先生、小さい組の父兄、園生活のお手伝をして下さった方や卒業生（大学

生になっていたり、幼稚園の先生をしていたり、すでにお仕事をしている様な」などです。いわゆる大人社会の「偉い方」ではない方をお招きしてお祝いをしていただきます。尚、在園児はこの卒園式には参加しません。それ以前に「交歓会」をして、卒園式にはテープにとったお祝いのうたを流します。

● 保育証書の受け取り方

その年によって異なりますが、いろいろなタイプの子どもが合わさった園生活をくりひろげている私達の園では、一人一人園長の前へ出て行って受け取る年もあるれば、合同保育（年長）での生活のグループ毎に列び、紹介された後で証書を受け取る年もあります。子ども達が一番うれしい思いで受け取るために——を考えて展開します。心や身体にハンディをもつ子ども達も自然なかたちで受け取れることを第一に考えています。

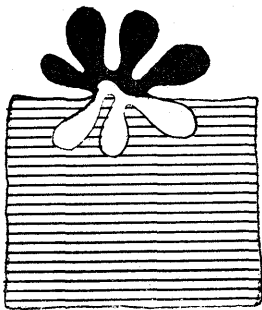
● 保育証書のこと

園独自の証書を用いています。証書ファイルの半分に証書を貼り、残り半分は、一番好きだった幼稚園の場所を各自がみつめて、担任と二人で写した写真を貼ってあ

る「保育証書」を用いています。尚、保育証書以外に、一人一人に園長が、その年の卒園式の説教で用いた「聖句」をサインした聖書が贈られます。

「私の園の卒園式」と改めて申し上げるほどの卒園式ではありませんけれど、私達はその年々の「子ども達」にとって大きな喜びと希望を贈る式にしたいと願いながら「それならば今年は何？」と云う問いからスタートして、毎年の卒園式をくりひろげているそれにつきる様な気がします。

（千葉市・愛隣幼稚園）



私の園の卒園式

野 辺 繁 子

二年・三年の子どもたちの園生活の中の楽しい思い出のひとつとして、いつまでも子どもの胸のどこかに残っているような式にするために、先ず対象である幼児にスポットをあてて考えてみました。
練習をしないようにしたい

残り少ない園生活を楽しく遊びたい三月に、式の練習を繰り返しては、当日を期待する気持ちが半減してしまふのではないかと考え、練習をしないで参加するためには先ず、平常のつみ重ねが大切だと思います。

- 人の話を聞く態度・内容の理解
- はっきり返事ができるように
- 先生から、物を受けとる時は両手で
- 二十分位の持続時間を持てるように

などを、五才児の三学期までに、ひとりひとり身につくようにねらいを持ち指導して行くようにします。

卒園式に期待をもつように

幼稚園での毎日の活動の中で、小学生になる喜びを味わうように仕向けていきます。

- 手拭いづくり

子どもたちがひとりひとり好きな画を半紙を八等分した紙に描いて、ビニール袋に入れておいた中から自分一つ選び先生や友だちと手拭大の台紙に並べて、染めに出し、クラス毎に手拭にし、卒園式当日に渡します。

- レコードづくり

カメラが各家庭に普及してきているので園のマーク、建物の写真の入ったアルバムは入園祝として贈り、園児の写真は、その都度渡し各家庭で貼るようにします。そのかわりに、子どもの声をレコードにつくる事にしました。A面は、クラス全員で歌う木の実幼稚園々歌と、皆の一番好きだった歌をふきこみます。B面は、担任と子どもの対話で、クラスの名前、担任、仲よしの友だちの名前、楽しかった行事、大きくなってなりたいたいものなど担任の問いに答えるようにします。次は子どもがリクエストした歌を担任の伴奏で歌います。最近では、片面七分

間に全部をふきこめる大判にして、片面はクレラップをはって保存用ができるようになりました。

●紙芝居づくり

幼稚園生活の思い出の中のいくつかを取り出し、各クラスで紙芝居をつくりまします。「入園式」「遠足」「おもちゃつき」「運動会」など、その年によって各クラスのテーマは変わりますが、子ども達が描いた絵を切りぬいて、保育者や友だちと一緒に構成して台紙に貼り、説明は担任と会話形式にして歌を入れたりして、子どもたちを考え

テープにふきこんでおきます。

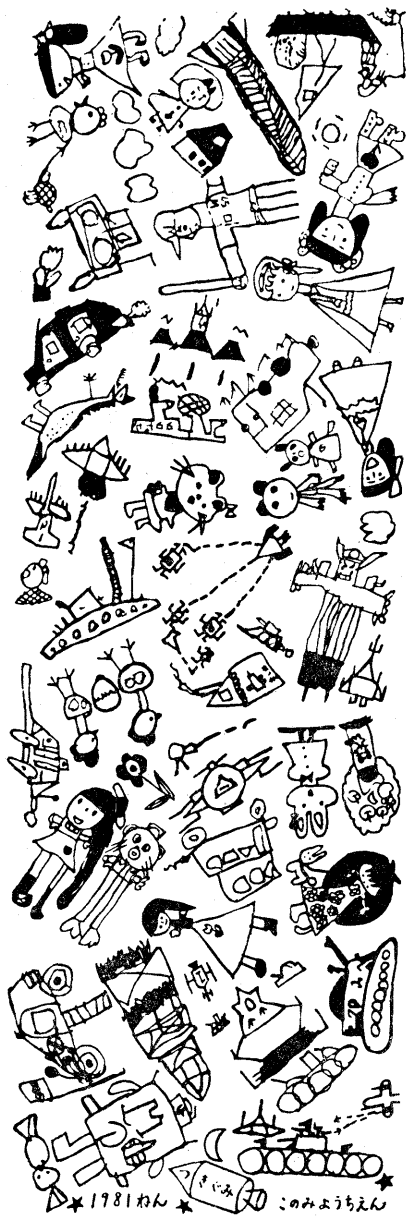
卒園式について

○卒園式は、毎年三月の第三日曜日ときめ、両親が参加できるようにしました。

○式場づくり

ステージの奥のカーテンには、子どもの描いた絵をはって、緊張をやわらげ、ステージの前には、花束を花筒にさして並べ明るくするように心がけました。

○卒園式次第



▲手ぬぐい

一 奏 楽

園長氏名

静かなピアノの曲に子どもたちが入場し着席

二 開会のことば

園児を中心として計画いたしますので失礼がある時はお許し下さいという事も告げるようにします。

三 園事報告

四 優勝カップ返還

運動会の対級リレーのカップを返還します。在園中に誰もが一回は代表者として出る事のできるように配慮し男女別に持つて出るようにします。

五 保育証書授与

子どもたちに理解できる証書をと思い、文面をやさしくしました

「 保育証書

氏名

あなたは 木の実幼稚園に○年のあいだまいにちげんきよくかよって つよいからだとりっぱなこころのこどもになりました

昭和 年三月 日

」

保育証書は、ひとりひとりに園長が手渡す時に「おやすみしないで よく来ましたね」「大きな声でお返事ができて偉かったわね」「遠いところから 歩いてきたのね」など一言ずつ添えるように留意しました。

証書は最後まで、自分でしっかりと持っているように筒の中に入れたのを受けとるようにしました。

一三〇名で時間がかかるので時間をみはからって、起立して楽しく歌をうたって一息つくようにしました。

六 皆勤精勤賞授与

三年皆勤・二年皆勤・一年皆勤・精勤は代表者が受けるようにします。

七 思い出のアルバム

父兄と子どもとのかけあいで歌います。

八 園長告辞

短時間で子どもにわかるように話し父兄にはひとことお祝いをいうようにして細かいことは、謝恩会（前二日の金曜日）で話すようにします。

九 来賓祝辞

小学校長 P T A 会長 旧職員など最少人数にしほり、一人三分以内に依頼します。

十 紙芝居

出入りの楽な場所に坐った子供が二人でステージに持って行き、テープを流します。この役も前出の代表の一人の役目

十一 記念品贈呈

十二 記念品授与クラス代表の二人の役目

十三 理事長あいさつ

十四 卒園のうた・園歌

十六 閉会の辞

十七 園児退場

ホタルの光の奏する中で、ステージに飾ってある赤いカーネーション二本とフリージア二本の花束を、理事長・園長来賓の方々より一人一人が手渡され、証書の筒と大切に持って退場し各クラスへ戻ります。

何の変哲もない卒園式ですが、子供本位に考え毎年改

良しています。紙芝居は今年度からスライドにして、テープの説明をメインにする予定であります。

謝恩会は親と保育者だけで開いていただくようにして、子どもたちは年中少児と「お別れ会」を在園児より鉢植えのイチゴを卒園児からはクラスで使う、布を貼ったダンボールとか、紙粘土でつくったままごとの御馳走などを贈るようにしています。

(埼玉県・木の実幼稚園)

私の園の修了式

小坂田玲子

修了式は幼稚園生活最後の日であり、また新しい門出への出発の日でもあります。この幼稚園最後の保育の日である大切な一日を、大人中心のお別れの儀式に終わらせたくありません。できる限り日常生活の延長として、楽しく落ちついた雰囲気の中にも、多少の厳しさも加わっ

た、しっとりとした心の通い合う式にしたいと心がけております。

以下、私の園の修了式について述べたいと思います。

一、修了式を迎えるまでの準備と練習

式の練習や準備にあけくれた、幼稚園生活を終わらせるといふことのないように、普段の保育の中で見通しをたて、式に必要なことを無理のないように少しずつ入れていくようにしています。ですから式次第に従っての練習は一回やればそれですみます。普段存分に自分の遊びを遊んでいる子どもは、ことさらに練習しなければと目くじらを立てなくても保育者がこうしてほしいと思うことは、自然のうちにもこちらの思いを感じとってやってくれます。また、練習を積まなくてもできてしまうという本当に不思議な現実がおこるようです。それは普段の生活をいかに大事にしているかということ、生活から離れない式というものを心がけているからではないかと思われまます。

二、会場

式が外面の意匠にこだわりすぎて内面が空虚になって

しまうことのないように、温かいぬくもりのある会場設営になるように工夫しております。会場は、毎日使っている修了児の保育室で行います。

三、修了証書

修了証書	
園印	氏名
生年月日	
あなたは 幼稚園の課程を修了したことを 証します。	
年 月 日	
第 号	氏名印
割印	東京都区京区立駕籠町幼稚園長

修了証書は、右記のような一部印刷のものを使用しております。氏名、生年月日等は、園長が本人の戸籍に登録されている文字を、楷書でいねいに記入します。記入が終わると職員が、一枚一枚心をこめて押印し作成し

ます。

四、式次第

式次第

- 一、はじめのことば
- 二、園歌
- 三、修了証書をわたす
- 四、園長の話
- 五、お祝いのことば
- 六、お別れのことば
- 七、修了のうた
- 八、おわりのことば

五、式の流れ

式は十時に始まります。九時四十分頃、保護者が着席し、続いて在園児が入場します。会場には、四季折々の曲が流れており、静かで落ちついた雰囲気になるよう配慮しています。九時五十分園長が来客を案内して入場します。つづいて修了児が胸に手造りの花をつけて入場し

てきます。それを拍手で迎えます。全員着席すると主任の司会、進行により式が始まります。

1 司会がはじめの言葉をいいます。次に全員起立してはじめの礼をします。

2 起立したままで園歌をうたいます。

3 園長からひとりひとりに修了証書が渡されます。修了証書の文字は最初の幼児のものを読みあげます。次からは名前のみとし、「おめでとう」のお祝いの言葉を添えて、ていねいに渡されます。修了児は名前を呼ばれたら元気に返事をして、園長の前まで歩いて行き「ありがとうございます」と言って受け取ります。その子なりの歩き方で進み、いただく姿の中にその子のあり方の全てがあるように感じます。拍手がおこり参会する大人たちが感動するのは、小さいながらも一生懸命に生きている、その姿、その歩みを目の前にするこの時でありましょう。証書は開いたまま渡され、受け取った後、うしろに用意してある盆の上に乗せて着席します。自分の子どもの名前を呼ばれた保護者は共に立ち、皆から祝福を受けます。会場には、子ども達

が二年間のうちに歌ってきた歌を静かに流します。

4 園長から修了児に、励ましのことばがあります。

5 教育委員会の方がお祝いのことばをくださいます。一

二分程度です。

6 父母の会々長がお祝いのことばをくださいます。来客のお言葉は二名までにとどめ、他の方は紹介のみで済ませます。祝電は、修了児に関係の深いもののみ司会者が読み上げ他は名前だけ伝えます。

7 お別れのことばは、園生活の思い出を中心に在園児が呼びかけ式に言います。その内容は、保育者と子ども達とで前もって話し合い歌をみんなで作ります。歌は

「卒業の歌」松崎勲作詞で、一番を在園児、二番を修了児、三番を全員で歌います。

8 修了の歌をうたいます。曲は「卒業式の歌」天野蝶作詞で修了児のみで歌います。これが幼稚園生活最後の歌になります。

9 司会のおわりのことばで式は終了します。式の所要時間は約三十分です。修了児と保護者はその場に残り、来客を園長が案内して退場します。つづいて在園児が

退場します。

六、式終了後

修了児は円形に座り、担任より修了証書を筒に入れてもらいます。二年間幼児と共に過してきた担任にとっては、その重みを肌で感じ、感無量の時でもありましょう。巣立ちゆく子ども達の健やかな成長を祈りつつ語らい園庭に出ます。園庭には在園児が自分達で作ったお花のアーチでトンネルを作り待っています。保護者と一緒にお花のトンネルを通りぬけ、三三五五、帰路につきます。

以上のような方法で進めておりますが、幼児教育の本道を生かした、よりよい式を願いつつ、毎年のことながら工夫をしております。

(文京区立駕籠町幼稚園)

冬の日の保育

—雪とHちゃん—

田村満紀子

あまりの上天気に、室内に入るのはもつたない。そのまま、みんな光の子になって、外気で遊びます。新しき道発見……と

白雪をふみ歩く子。しゃがみ込んで、雪をかため雪ダルマを作る子などいろいろ。

「先生、何やってるの？」雪の中に、顔をうずめている私に、元気な声。顔を上げてみると、首をかしげたAちゃんが立っている。「こうやってね、雪に顔うつしてるの。」
「えっ、あっほんとだ、顔だ」雪の中に、凹版にはったような顔がある。「ボクもやーろうっと。」次々に、真似っ子さん達がやって来る。「ひゃっこくて（冷たくて）気

持いいね」「なんにもみえないね」と、それぞれ感想を言ってる。

「先生達小さい時、女の子がやってるとね そーっと誰かやって来て、急に上からギューッと、顔を押すの。息が出来ない位。びっくりさせるいたずらっこがいたのよ。」

「え、だーれ」「何て言う名前?」「よっちゃんっていうの。幼稚園のよっちゃんじゃないのよ。もう、おじさんになってるの。」
「ふーん、おとなでもいたずらするの」「小さい時って言ってたでしょ」と大きい組のお姉さん。
そこへ「田村先生みーつけた!」と、し

がみついて来たHちゃん。いつも、「Hちゃん」と呼ぶと、「センセ、どこ?」と声のする方を探すのに、どうしたのでしょう。「どうしてわかったの?」とききたい。「青だから田村先生!」私の心を見ず、かしたような返事です。いつも、おどけた答え方をするHちゃん、今日は、全身で喜びを表現しているようです。普段、青っぽい服装の私。カラーで区別出来たのです。

Hちゃんは、裸眼○○○一位の弱視。その上、眼底が振動するという悪条件のため、メガネをかけても見えにくい状態といえます。そのHちゃんが雪の中で、喜々として動きまわっているのです。いつもは茶色っぽい地面に立っているのに、今日は一面銀世界。ちょうど真白な紙の上に、クレパスをのせたように、彼女にははっきり見えたのでしょうか。
八戸地方は、からっ風と、ガリガリに凍りついた地面。耳がいたくなるようなキリ

キリした寒さ。素手で鉄棒をにぎったら、

走りまわっています。子供達は勿論本気。

衣を着てるんでしょ」「そう」

手がくっついてしまうような寒さも時には。ですから、かえって雪が降った方が暖かいのです。そして、遊びの種類も急に増えて来ます。この積雪を、子供達も教師も、

こちらにも本気でないと、多勢に無勢でかたいません。もう、暑くて暑くてたまりません。「タイム、タイム」雪の上に、ドテソとひっくり返る。目に入るのは、どこまでも高く澄みきった大空。

「H子にもみえる」と、まぶしように、目をしょぼしょぼさせながら、いつものちよつと甘えた声。「そう、Hちゃんにも見えた。よかったねー」(Hちゃん、お心の目で見たのね。目があっても、美しいものを美しいと見れない不幸な人より、Hちゃんは、何と幸せでしょうね)

心待ちにしていたところなのです。大喜びの子供達。でも、その中でも、Hちゃんのはりきりようは群を抜いていました。どうやってうれしさを表現しようか、表現法がわからないといった様子。それが、こちらまで、伝わって来るのです。

「早く又やろう」といたずらっぽ目からのぞき込む。「みんなも寝てごらん。気持ちいから」「どれどれ……」。冷たい風も、こ

もうすぐ、豊年祈念の「えんぶり」の笛やタイコの音が聞こえて来ることでしよう。

「田村先生に雪ぶつけろ」と、リーダーになって指令します。さっきから、あちらこちらで雪投げが始まっていたのが、急にこちらへ集中攻撃。あまりサラサラしすぎて、球にもならない雪。でも、みんな追っかけては投げつける。こちらも握っては投げ、握っては投げ、逃げたり追っかけた

「あるわよ。おいしいものね」「ウン」「あれ？ あそこにイエスさまみたい」「どこどこ？」「ほらあそこ」「本当だ。ピデオのイエスさまみたい」なるほど、手をひろげて立っていらっしやるイエスさまのよう。

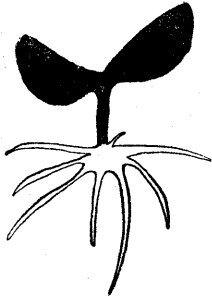
雪の少い八戸にも、三月には、必ず「屋捜し」と呼ばれる大雪が降ります。その雪が溶けないと、本当の「はちのへの春」がやってこないのです。

子のように、大胆な動きで、あっちこっちと

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

(青森県・八戸幼稚園)

エリクソンと幼児教育 (15)



仁 科 弥 生

同一性の危機 ルターの場合(2)

青年期は、若者が古いものを捨てて新しいものを選びとり、それに身をゆだねることに熱心になる年代であり、また、何事についても決断をもっとも自覚的な形で行おうとする年代である。古いものとして捨てられるものは、その若者のそれ以前の生活であり、それは普通、両親の生活様式に内在している価値観に対する疑問視や否定となつてあらわれる。それだけに、新しい献身すべきものを求める欲求も強く、自分の不確かな精神世界に秩序の装いを与えてくれそうな思想や価値をもった言葉などにことさら敏感に反応するのである。

青年ルターの場合も、自分をつくり、ある意味で自己を決定した両親から自分を解放したいというやみがたい欲求につきうごかされていただろうと想像できる。しかし彼は自分の未来を選択する者として自己を確信することがまだできないでいたと思われる。エリクソンは、このように自分で選択をすることができないとき、或はそ

うすることの責任を引受ける準備がまだできていないとき、若者の社会的な身分はより大きな力で決定されることになる。マルティンの場合、それは神の啓示という形であったということになる。

しかも、マルティンが修道院に入ったことは、彼の父親の野望とはまさに正反対の方向であった。エリクソンは、たとえ高度に理想化された自己像であっても、このような、一人の人間の成長過程における支配的な価値観に真正面から対立するような自己像を否定的同一性の部分と呼んでいる。それは、その人間がそうならないようにと警告されてきた同一性であり、また、分裂した心でしかそうなれない自己、しかしそれにもかかわらず心の底から抗議しつつ自らを強いてそうならせる自己を確認するということを意味するという。そして同一性の危機において、若者は権威的な父に反発し、自分の自律性を主張しようとして、あえて否定的な同一性を選びとることもある。マルティンはその古典的な例であろうという。

結局、父ハンスは悪口と不満を並べ立てたあとで、マルティンの修道院入りに同意したと伝えられている。しかし、マルティンは父の誠実さを疑い、それ以後もけつして疑うことをやめようとしなかったという。エリクソンは、この疑惑が宗教的疑惑や権威に対する懷疑へと転化したと考えている。さらにエリクソンの言葉を引用すると、「父が子どもを罰するとき、気まぐれや悪意によってではなく、本当に愛と正義によって罰するのだから」というマルティンの幼少の頃の懐疑が、後年、マルティンの修道院の師たちも認めざるをえなかったあのような激しさをもって、天の父に投射されたのである。「それは、師の一人をして「神がきみを憎むのではない。きみが神を憎むのだ。」と言わしめたほどであったという。そのことは「マルティンもまた、自身の義認を必死に探究しながら神を審判者として正当化するような永遠の義の論理を模索していたということである。」とも述べている。

二五歳のとき、ルターはウィッテンベルク大学に移さ

れた。その神学教授であり、アウグスチン派修道院の副院長であったジョン・シュタウピッツは、ルターの苦悩に共感し、ルターにとって何が必要であるかを洞察したすぐれた上司であった。彼はルターと論争することをせず、もっぱら彼に講義や説教をさせたといわれる。エリクソンによれば、シュタウピッツは、ルターが「出会い、かつ知りえた最良の父親像」となりえた人物であり、また、同一性の形成に必要な「承認」をルターに与えた人物である。シュタウピッツ自身はおそらく若者の創造性や可能性に郷愁を感じ、ルターの中にある真に宗教的な何ものかに父親的な役割を果たすことに喜びを感じたのであろうとエリクソンは推測する。そしてルターもその師の知性の深さに、完全に頑強な父親像を見いだしたと思われる。

そもそも、強い存在である父親は男の子の同一性をめぐめさせる重要な役割を果たすと考えられている。男の子は不安におそわれたり、混乱したりすると、母親のところにもどる。しかし、やがて子どもは男であるという

ことの特徴を自覚するようになり、父親の男の体の感触や、導いてくれる声を愛することを知るようになる。それはちょうど、自立的な存在にとって必要な、最初の勇氣を子どもがもちはじめた頃であり、父親は子どもの自立的な存在になるための保護者の機能を果たすことになる。そしてその導きの声は子どもの同一性の実感の主要な要素となるのである。しかも同一性の初期の確立を保護する父親に加えて、子どもは青年期には彼らの確立した同一性を保護してくれる人が必要とする。しかしそこに深くかかわることができるのは、ただそれに基づき、燃えあがりを引き起こすだけであらうとも述べている。したがって、シュタウピッツとの出会いはルターにとって実に幸運な出来事であった。

ところで、前回でも触れたように、激しやすく、支配的であった父親を恐れて育ったルターは、修道士とし

て、父なる神の前でひどく恐れており、苦悩しつづけていた。そのようなルターにシュタウピッツが与えた助言、すなわち「人間は神の愛を予想するからではなく、それをすでもっているから真にさんげできるのだ」という言葉が、ルターの新しい神学の土台となる基本的洞察を提供したといわれている。エリクソンによれば、その言葉が、ルターに乳児期に母親から与えられたあの信頼感、しかし永年の間失われていた信頼感を回復させ、しかもそのすばらしい宝が最初から人間に与えられていたということを再認識させたのだと解釈されている。そしてルターの徹底した聖書研究が、われわれはただ神の恩寵を信頼するだけでよい、「義とされる」のはただ「信仰のみ」によるという新しい原理にルターを導いたとされている。つまり、「彼は自らの同一性の根本的な力(神の言葉であるが)を見いだした。その義認の実感、肉親の父も、天の父も共にマルティンに対して拒絶していたものであり、宗教学人にとっては同一性の基盤となるものであった。」したがって、ルターは神学の教授としてま

た説教者として言葉で明白に述べざるをえなくなつてから、ようやく内面的な一致に到達したことになる。この過程についてエリクソンは次のように述べている。ルターは「講義をするという行為の中で、自己の精神の均衡と同一性を見いだし、さらにそれらをもって神と自分自身との関係に関する新しい体系を見いだした。」そしてエリクソンは、シュタウピッツの示した配慮は、一人の人間にとって必要であるものと、激動している現実世界が要請しているものとを、講義や説教という一つの行動計画の中で結び合わせた適切な処置であったと評価している。またこの目的のために一定の時間がモラトリアムとして必要であったが、ルターの時代には修道院がその役割を果たしたことは興味深い。こうして、ルターはそこで、真の歴史的な敵を知り、その敵を強く効果的に憎むことを学ぶことができたのである。エリクソンは、とくに働くということが創造的な意味と共に治療的な意味をももっていると考えており、オーステイン・リッグス・センターで青年を治療する際に、彼らの働くというこ

との重要性を強調している。つまり労働の中で、彼らは問題を解決し、計画し、社会的な交わりをする適応力を発揮することができるようになると考えられている。そのエリクソンにとって、シュタウピッツが苦悩しているルターに対してとった処置はきわめてすぐれた治療的行為であったと思えたようである。

さらに、エリクソンは、ルターの生きた中世のヨーロッパの歴史を精神分析家の目で問い直している。われわれは、このルター個人の心理的な歴史と中世の歴史という二つの史的過程の、複雑で必要な絡まりあいの分析に注目しなければならぬ。なぜなら、そこには、臨床家としての洞察から生まれた、事例を社会や歴史から分離してはならないという彼の持論が鮮明に論証されているからである。

ちなみに、ルターを取りまく歴史的、社会的状況を概観してみると、ドイツの場合、ルネサンスはドイツ人文主義という形で根をおろしたといわれている。十五世紀後半期におけるハイデルベルク大学はドイツ人文主義の

中心地として栄え、エルフルト大学も例外ではなかった。たとえば、人文主義者として有名なヨハン・ロイヒリン（一四五五—一五二二）は、ドイツやフランスの諸大学で古典と法学を学び、法律家としてウエルテンベルク公に仕えていた。彼はイタリアへ旅行し、ユダヤの秘教「カバラ」に興味を抱くようになり、ヘブライ語研究に熱中し、帰国後、旧約聖書をヘブライ語の原典にもとづいて研究を始めたと伝えられている。一五〇三年には、エルフルトの近くのゴータの町でコンラート・ムチアン（一四七一—一五二〇）が人文主義とそれにもとづく新しい神学を樹立するために聖書と教父の研究を進めていた。こうした古典の研究と古典の知識はドイツ人の眼をより広い世界に向けさせ、ドイツ国民という自覚を芽生えさせたという。人々は、むつかしい議論や形式にとらわれずに、「人間的な」要求を満たしてくれる信条を求め、また自分たちの生活にふさわしい信仰を模索しはじめたのである。新敬神派もそのような動きの中で生まれた。ルターが一四歳の時、マグデブルクで接触し、強

烈な印象を受けたといわれる「共同生活兄弟団」はこの派の活動を代表するものであった。この僧侶たちは修道士風な共同生活を営み、宗教を真に貧困の生活の中で生きていた。彼らは聖職員としての宗教的な没頭の深さと純粹さを強調した。また病人の看護や慈善活動や、教育活動なども行ったという。

一五世紀の半ば頃に、ヨーロッパに東方から紙の製法が伝わり、良質の紙が量産されるようになった。そして印刷機の発明によって活版印刷による書物の刊行が可能となり、聖書が普及し、また書物の価格が下がり、教育大衆化が始まったといわれている。このような時代の流れと、やがて火をふくルターの宗教改革とはけっして無縁のものではなかったのである。

さて、エリクソンはホイジンガの『中世の秋』（一九一九年）を引き合いに出している。そして、ホイジンガはフランスとオランダにおける滅びゆく中世についての研究の中で、文学や芸術作品にもとづいて、中世的な同一性の崩壊と、新しい自治都市の市民の同一性の出現と

を記述しているが、エリクソンはその記述がルターの時代および状況にもあてはまると考えている。すなわち、一五世紀には灰色にくすんだ陰うつさが人々の心をおおっていた。人々はこの世界や人生の苦難と悲惨とを見、いずこにも退廃と近い終末のしるしを発見すること、つまり時代を罪とみなし、軽蔑する風潮が蔓延していた。またホイジンガは「まさに終わろうとしていた中世のこの時代ほど、死の思想に大きな強調を置いた時代は他になかった。日ごとに死を憶えよ、という永遠の呼びかけが生活全体を通じてひびきつづけた。」とも述べている。

さらにエリクソンは、中世的な同一性の崩壊について、次のようにとらえている。まずカトリック教会はその最盛期において、ギリシャ思想とキリスト教、理性と信仰の大きな融合をはかり、その結果、「威厳にみちた敬虔、純潔な思想、その時代全体の階層的、宗教的な様式によく合った、統合された宇宙論」を生んだと論じている。またそのような階層制を論理化したローマ教会の天才トマス・アクィナスが宗教儀式の様式化を通して、

聖体拝領の効力を裁判断、街の市場、大学などに広げ、中世の人間の同一性に、色や形や音などのかざりを与えたとその偉業に言及している。そして「中世の宗教儀式執行者は、微に入り細にわたって行為の規律をつくることによって、象徴的、比喩的な秩序の中に、また階級やカスト制という静かなる永遠の秩序の中に人間を位置づけようとした。かくて人間は大きさに多様化された役割と衣装によって保全された儀式との同一性を自分自身に与えることによって、大から小までの秩序にもにあずかった。」しかし、火薬の発明と印刷機の出現に対して、またペストや梅毒の流行、トルコ人の侵略、教皇と諸侯との争いなどの危険に対して、この儀式的な同一性はむしろ防衛でしかなかったと指摘する。こうして教皇制の精神的衰退やローマ帝国の崩壊は、一方において来たるべき救いに向つづけられていた一般の人々の将来に対する展望を縮小させ、他方ではローマ教会の説得力を維持する手段であった露骨さと残酷さを一層増大させることになったという。かくて「マルティンの幼児期、青年期

には、世界に関するマルティンの思想的な視野の中では、人間の魂は滅ぶべき体の中には真実の同一性を見いだすことができない、つまり不可避的な罪深い存在としての人間という理解がしみこんでいたといえよう。このような世界観にはただ一つの希望しか残されていなかった。すなわち、唯一の真実なる同一性、唯一の真実なる實在——それは神的な怒りであった——、その前で憐みを見いだす機会を一人の人間に保証する終末が、いつとはわからない瞬間に到来するだろうという希望である。」と論じている。

この中世の「暗黒時代」が去って、人々が人間性を尊重し、現実主義、合理主義にのっとり生きていくとしたじめたとき、人々はまず自分たちの精神を封建制の束縛から解放することを求めた。エリクソンは、「精神分析の理論で考えれば、ルネサンスは、すぐれて自我の革命であるといわざるをえないであろう。それは大規模な自我の執行機能の回復であった。」とらえている。その一つのあらわれが封建支配の道具となっていたカトリック

の教義と道徳から精神を解放することであった。ルターが神学の学士となってエルフルトに帰り、大学で講義を始めた一五〇九年は、エルフルトの歴史で「狂乱の年」といわれている年であった。市参事会を牛耳っていた都市貴族に対する平民の反抗から、全市が革命的騒乱の渦中に投げこまれたのである。ルターがこの動乱をどう受けとめていたかは明らかではないが、既成神学に対する彼の反感はすでにあらわれていたといわれる。したがってルターの言葉は待望されていた土壌に干天の滋雨として注がれたことになる。

このように考えてみると、ルターが学校や大学という世界に入ったとき、彼の内部にあったものは、前回で触れたように彼が幼い頃に受けた教育の矛盾葛藤に由来するものであったが、しかし、それはそのまま、彼を囲み、彼の上にのしかかっていた思想的、歴史的な世界の矛盾葛藤と対応していたとするエリクソンの主張が明瞭になってくる。そしてルターが青年として取り組んだ神学的な問題は、勿論、彼自身の父親との個人的な関係と強く

結びついた問題を反映していたが、しかしそれは同時に社会的、歴史的規模でとらえることのできる問題でもあった。つまり彼の生きていた社会自体も同様の葛藤、同様の危機の中にあつたのである。なぜなら、それらは、道徳の権威が、父親たちに、家庭に、市場に、政治に、城の中に、ローマに投資したものが直面していた危機の一部分だったからである。個人的な問題と世界的な問題とは共に一つの思想的な危機がもっている一部分だからである。

このように、エリクソンは、精神分析を歴史研究の手段として用いて、宗教改革者ルターの青年時代の再解釈をなしとげたのである。すなわち、彼は、ルターが回復しようとした信仰は、乳幼児の初期の基本的信頼への回帰であると分析し、また、父との関係の中に、ルターの生涯にわたって重荷となった過度の罪悪感を読みとった。「私にはルターのある特殊な創造性は、フロイトのいう父親コンプレックスとの運命的な格闘のある意味での中世末期の先駆を代表しているように思われる。」とさ

え言わせている。そして、遅延したルターの青年期は、再覚醒された幼児期の葛藤を伴った精神病との境界すれすれの状態を呈したが、それは、彼において時代と社会の崩壊をも内面化されていたことを示すものとしてエリクソンはとらえた。その間、副修道院長シュタウピッツの適切な指導もあったが、彼の内面の分裂を統合し、ようやく福音の新しい発見へと彼を導いたのは、他ならぬ彼自身の成長した自我の能力であったと分析している。こうしてルターが青年期の危機を克服し、最初の詩篇講義において新しい神学をうちたてたとき、ルターは歴史的な同一性を獲得したと、エリクソンは位置づけている。そのとき、ルターは二八歳であった。

また、エリクソンは、このような分析は、「個体発生の経験は歴史のある段階と次の段階を連結し、変形させていく不可欠のきずなであるということ」を十分に例証している。このきずなは心理学的なものであり、変形されたエネルギーとその変形の過程は、ともに精神分析の方法で図式化される。」と述べている。そしてさらに「ルター

の青年期の危機の解決は歴史が西洋キリスト教のある重要な時期につくった政治的、心理的真空を橋渡しするものであった。このような同時発生が、きわめて特殊な人格のめぐまれた才能の展開に一致すると、まさに歴史的な『偉大さ』をつくるものである。」とも述べている。

このことは、発達段階の一つの課題である「同一性の危機」を、既成の宗教がイデオロギーを支配していた歴史の一時代に、一個人がイデオロギーの回復過程で内面的にどうかかわりをもつかという関連でとらえたことになる。すなわち、エリクソンは、イデオロギーの概念を用いることによって、「同一性の形成」という問題を単に臨床的問題としてではなく、普遍的で歴史的な問題としてわれわれに提示したのである。

ところで、今日の青年にとっても、さまざまな経験を十分に調整し、社会的期待と、個人的選択とを重ねあわせて、一つの明確な自己定義へとまとめあげるといふ課題は、むつかしく、また時間のかかるものである。その過程で必ず一時的な混乱や失意を経験する。そのような

苦悩する青年たちを、エリクソンと同じように力づける
神谷美恵子の言葉を引用してこの回を終えよう。「青年
期にまわり道をするのは一生のころの旅の内容にと
って必ずしも損失ではなく、たとえもし青年期を病の中
ですごしたとしても、それが後半生で充分生かされるこ
とが少なくない。落伍者のようにみえた青年の中から、
のちにどれだけ個性ゆたかな人生を送る人が生まれたこ
とであろう。それは彼のころの道中で、順調に行った
人よりも多くの風景に接し、多くの思いにころろが肥沃
にされ、深くたがやされたためであろう。そのためにや
っと「わが道」にたどりついたとき、すらすらと一直線
でそこに来た人よりも独特なふくらみをもった、人のこ
ころにせまる仕事をすることができるだろう。」（『ころ
の旅』一九八二年）

参考文献（前回分への追加）

神谷美恵子『ころの旅』みすず書房 一九八二

ホイジンガ『中世の秋』堀越孝一訳 中央公論社 一九七一



本音と建て前

永井正子

A男とB男がけんかをしている。普段は特に仲良しという訳ではないが、決して仲が悪い方ではない。一緒に氣に入った遊びをしている時は、ほんとうに楽しそうによく遊ぶ——そんな仲の二人が、けんかをしている。まわりの友達はいびくり、呆然としている。

比較的体格の良い二人が取っ組み合いのけんかをしているのだから、それはもう、クラス中の子供たちの知るところとなった。

何が原因なのか、どうしてこんなに真剣な顔をしてけんかしているのか、誰にもよく分らない。せめて怪我をしないようにと、周囲に散らばっている積木を片づけ、他の子供たちにも離れているように言って、しばらく様子を見ることにした。

いつまで続くのかと内心ジリジリしながら待ち続け、もうこの辺りが限界と思った矢先、なんとこの二人は、

「もう やめようよ」とお互いに言い合って、今の今までかなりの勢いでしていたけんかを、あっさりと止めてしまい、再び仲良く遊び始めた。

A男とB男のけんかを心配そうに見守っていた友達も、野次馬見物を決め込んでいた子供も、この結末に満足した様子で、散って行った。

C子と、D子、E子、F子がけんかしている。

負けん気の強いC子は、孤軍奮闘。思いつく限りの言葉でもって、三人を相手に頑張っている。E子、F子は、交互に二言三言ずつ、どうもD子をかばっている様子。

D子が突然泣き出した。E子、F子の応援も力及ばず、C子の言葉に我慢できなくなったらしい。(D子が泣き出したことで、E子、F子の、C子に対する攻撃の言葉は、ますます激しくなるだろう……と想像し

たのであるが)

「D子ってすぐ泣くんだから」というE子、F子の言葉で、このけんかは終わりとなった。

G男とH男のけんかが始まっている。

体つきの大きいG男に、小粒のH男がよく抗している。もともとは、K男とH男のけんか。K男が劣勢と見たG男が加勢に来て、結局、G男とH男のけんかに発展(?)してしまったものらしい。

けんかの途中で引き止めて、事情を聞いてみた。

G男の言い分 K男がH男にいじめられていたから、

助けてあげようと思った。

H男の言い分 K男が、ぼくの作っていた積木を蹴飛

ばして壊しちゃった。

K男の言い分 そばを通っただけなのに、急にH男が

ぼくのことをぶった。

『電車の中でけんかをしていた人のひとりが殺された。同じ車両に乗り合わせていた人たちは、誰も助け

ようとしなかった』

『歩道を通行中、些細な事から口論となり、ひとりは刺されて死亡。他の二名重傷』

建て前：いじめられている人を助けよう

本音……自分が傷ついたら困るから、知らん振り、知

らん振り

子供の世界のけんかと大人の世界のそれとは、一概に比較できないとは思いますが、それにしても、子供から大人になるどの時点で考え方が転換するのでしょうか。世渡りがうまくなる処世術を身につけるといふことは、考えている事と行動とが必ずしも一致しない、いえ、この二つがはっきりと分離することを意味する——いつまでも自分の気持ちに素直でいて欲しいと願う反面、感情をコントロールする力を身につけて、荒海に漕ぎ出て欲しいのです。

今、幼稚園を離れようとしている子供たち、どうぞ本音と建て前どちらか一方に片寄り過ぎないで、バランス良く育ててくださいと願うのは、大人の、私の偏見でしょうか。(お茶の水女子大学附属幼稚園)



ブリュエルの「子供の遊戯」 10

—「ボール遊び」から「穴の中へ」まで—

森 洋 子

68 ポール遊び Baispel (図一)

遊具としてのボールはすでに紀元前一四〇〇年のテベの墓廟から発見されているが、人類の歴史とともにこの遊びはポピュラーなものとして愛好された。

ブリュエルの時代、ボールは白い皮ないし布で作られ、牛や馬の毛、おが屑、小砂利が中に詰められた。子供たちはボールがすり切れてしまつて、新しく買つても使えないとき、よく自分でポロ布をまるめて作つたりし

た。

一般的な遊び方は、壁にボールをぶつけ、それがはね返ったとき、また壁にむかつて転がし、返ってくるとき、地面に置かれた相手のボールに当れば得点となる。当らない場合、そのボールが相手のそれに近い位置に来たとき、もちろん相手にとって有利になる。ボールの代わりに、オハジキ、ナッツ、ボタン、柄、小箱、九柱戯用のピン、棍棒を用いることもある。

なおブリュエルの版画「阿呆の祭り」は、一五五一



図1 ブリュエゲル「ボール遊び」(「子供の遊戯」の部分⑧)

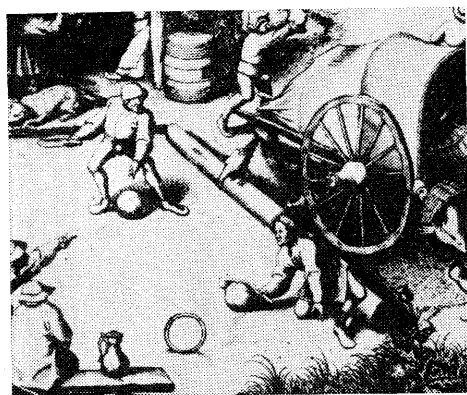


図2 ブリュエゲル「ボール遊び」(「シント・ヨリスの縁日」の部分) 銅版画

「ボール投げ」といってひとりで空中高く投げたり、二人でキャッチボールのようにして遊ぶ様子もみられる。また十六世紀のオランダの版画(図4)には、こう書かれている。「ボール投げをするとき慎重さが必要だ」とくにとても上手に

年のラントヌヴェール(国内戯曲祭)の道化コンクールから啓発されたものだが、ここでは前景右端の小さな杭に当てようと、大勢の阿呆たちがそれぞれのボールを手集まって来ている。しかしここでのボールは(阿呆のボール)それ自身が「頭」を意味するという、きわめて

寓意的な内容であった。

ほかに同画家の版画「シント・ヨリスの縁日」(図2)で二人の大人がクリケットを使って輪の中にボールを入れようとしているが、この種のより複雑な大人用のボール遊びも当時愛好されていたことは、他の例(図14参照)からも知られる。

十八世紀のオランダの木版画(図3)では、いわゆる

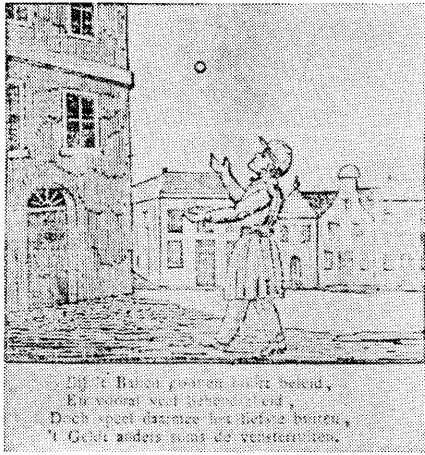


図4 「ボール投げ」(部分) オランダの
木版画, 19世紀前半



図3 「ボール投げ」(部分) オランダの
木版画, 18世紀

やるべきだ。

一番よいのは外で遊ぶこと

そうでなければ、時折、窓ガラスを

こわすことになる。^{注1}

この詩から想起するのは、一六五八年のレイデン市の
通達で、道路や教会の境内において、ボール転がし、指
骨遊び、長い鞭をふり廻したり、水泳などの遊びが、禁
じられたことである。^{注2}とくに人の多く集まる教会の境内
や道路でのボール投げは危険であり、かつ窓ガラスが割
れる恐れもあったのであろう。しかしブリュージュの画
面では、子供たちがほんの五十センチ位の近さから壁に
ボールを当てているので、危険な遊びには属さないだろ
う。こうして当時は一寸とした空間があれば盛んにボー
ル投げが行なわれたのである。

69 おっぺい「t Pissertje (図1)

お尻を壁の方にむけて、女の子がしゃがみながらおし
っこをしている。子供は好奇心の強いものだが、白い帽



図5 「おしっこ」オランダのタイル画、
18世紀

子をかぶったこの子供は、じっと尿の行先をみているようだ。ヒルズは左横の二人の悪童たちはボールを壁ではなく、女の子の頭をめがけて投げようとしていると推測しているが、はたしてそうであろうか。広場に二百名近い子供が遊んでいるわけだが、用を足している姿を画くことは、一般にブリューゲルの作品としては決して珍しくはなかった。版画「ホボケンの縁日」や油彩画「ネー

デルラントの諺」でも、排尿や排便行為をごく日常的な情景として画面に登場させている。

なおオランダのタイル画にもひじょうにしほしほの情景(図5)がみられる。とくに川などでちょうど仲間が泳いでいるとき、放尿で相手を驚かしているユーモラスな場面も好まれたようである。

70 指骨遊び Het Kootspel (図6)

オランダ語 Koot は解剖図的にみると、豚、牛、羊などの動物の指骨(または趾骨)のうち、基節骨(古くは第一指骨とよばれた)Phalanx proximalis (図7、8)にあたる。筆者は豚や羊の基節骨などを実際に手にしたが、上部は図8のように、その上の骨(中手骨)との鋭い接合面のある関節面、そして下部は滑車面のある丸い二つの関節頭があった。関節面を下にすると、なかなか安定した立ち具合なのに驚く。骨の長さは豚の場合4センチ位(牛は6.5センチ前後)で、20グラムの重さである。^{注4}さてネーデルラントでは古くから大人たちの間で、こ



図6 ブリュエゲル「指骨遊び」(「子供の遊戯」の部分⑩)

う。両遊具ともすでにギリシャ、ローマ時代から知られていた。画面をみると三人の男の子たちが腕を振り上げながら、手にした骨を壁の前に横に一直に並べた六個の骨をめがけて投げようとしている。すでに一個が倒れており、女の子が直そうと身をかがめてい

の骨は賭事に用いられたらしい。子供たちの間では、骨投げとか、今日でいう一種のボーリングに似た遊戯に愛用された。骨を遊具とする例として、他に1の「お手玉遊び」(本誌昭和五十六年九月号参照)があった。この場合も動物の後趾の距骨が遊具として利用されている。子供たちはこれらの骨を屠殺時にはよく収集したのである

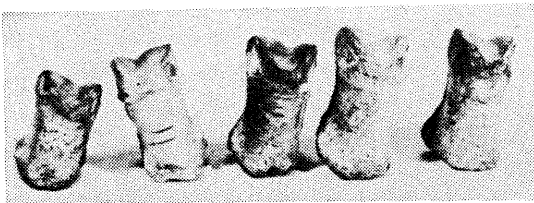


図8 基節骨 (図7と同じ出典 afb. 387 より)

る。さらに別の一個は前方に転がり始めている。ところで子供たちは丸味のある関節頭が上になったとき、「ストーフ」(Stoof = Stomp 鋭利ではない、鈍い)の意)とか「ケウス」(Kuis きれいの意)と名づけ、時にはその上に十文字の印をつけた。また窪みのある関節面が上の時は「シャイト」(Schift ウンコ)といった。

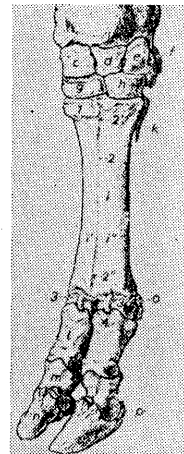


図7 牛の前足の骨格、
lが基節骨

J. Pluis, *Kinderspelen op tegels*, afb. 386より

遊び方は古来、種々知られているが（といっても十九世紀末には消滅した）、そのひとつは、骨を投げたとき、ストーフが上になるかどうかというもの。十九世紀の「子供版画」に、「骨がストーフになったら、君は十文字の印をみるぞ、したらこの遊びは勝ったと知りたまえ」と銘記されている。そのため、子供たちは種々の作戦を考え、関節面に穴をあけ、鉛を詰めて土台を重く、安定する工夫をしたこともあった。

このほか、壁に並べた骨にむかって自分の骨を投げ、倒れた骨の数だけ、自分のものとなるという遊び方もある。画面の少年も左手に骨入れ袋をもっている。ハルトマン・レンスによるとストーフにするかシャイトにするかは仲間同志であらかじめ賭をするという。しかし、筆者が実験したかぎりでは、ストーフになることはあっても、シャイトの状態で立つということは、平な床ではほとんど不可能で、せいぜい柔らかな砂地か、でこぼこの地面で偶然、支えを得て可能のように見えた。ゆえにハルトマン・レンスのいうように「シャイト」に賭けるこ

とはありうるのかどうか疑問である。

J・A・カロムは一六二六年、アムステルダムで発行した匿名作者の『子供の書、子供の遊戯の寓意』の中でこの骨遊びをこう語っている。

「(指骨が) 重くて、中側の厚いものならば大抵は勝ちとなる。

しっかり止まり、(下が) 四角だとすれば

仲良しを金持にする。

早く、軽く滑ってしまうのは

自分の側に倒れ

右か左か背中側に倒れ

われらの若者は

早く勝負がつきすぎる、と思うのだ。^{注6}

指骨の関節面は鋭利な凹凸面で、しかもかなり固く重いものだから、もし顔に当たったら目がつぶれるほどの大怪我をする。しかも時には骨の代わりに石が利用されることもあった。ゆえにもし投げそこねて窓ガラスに当たったら危険である。そのため、68のボール投げで記述した



図9 E. シリマン「指骨遊び」(部分)(J. カッツ「結婚について」1642年より)銅版画

家の内庭で、ボール、骨、石投げ遊びを禁じる、それに違反したときには子供の両親が五ストイヴェルスの罰金を支払う、という通達を出した場合もある。^{注7}

骨遊びが画かれたもとも古い例のひとつは、十六世紀初期のフランドルの時禱書(ロンドン、大英博物館、通称『ホルフの書』Add. MS 24098, fol. 27v)の十月の



図10 「指骨遊び」(部分)オランダの木版画, 18世紀

ように、一五五七年ハールレム市で、二、三の教会の境内や街中の

ミニアチュールであろう。そこでは全頁大に、新たに樽詰された葡萄酒の取引風景が画かれ、その欄外にこの骨遊びをする子供の姿が画かれている。そのほかこの遊戯はカッツの『結婚について』の挿画の一部分(図9)、十八世紀の木版画(図10)やタイル画などに豊富に画かれている。ただし骨遊びは男の子が主体だったらしく、図11のように「指骨は男の子にとつての快い楽しみだが、女の子のものではない」と記され、女の子が仲間はずれにされているところが面白い。



図11 「指骨遊び」(部分)オランダの木版画, 19世紀前期

十七世紀になると、この骨遊びに教訓的意味を与えた詩人がいる。道徳詩人のヤコブ・カツの「骨遊び」の寓意詩を紹介しよう。

「骨遊びはそれをよく知る者にとっては面白い
牛が家畜小屋に行くかぎり

骨はまだ道路での遊びにならない。

しかしこの動物が小屋から出され悲しげに倒れるとき

そうすればすぐに、その脚は

道路での子供たちのものになる。

彼らは大騒ぎをし骨や膀胱で遊ぶ。

吝嗇家は自分の財産を守る

誰もの利益にならないように。

彼は自分の懐にそれをしっかりとしまふ。

死の苦しみの時まで。

しかし彼が死ぬや否

遺産を相続した人間は

それを喜んで明るみに出す

これまで太陽も月も見なかったそれを。

この吝嗇家が地面に埋めたもの

それはやがて怠かな快楽のためのものになる。^{注8}

ここで、ブリュッゲルの画面には画かれてないが、す

でに当時、盛んに好まれた類似のゲーム、九柱戯につい

て触れてみたい。すでに十五世紀末、フランス・ヴァン

・ブリュッゲの銅版画「農民の喧嘩」(図12)では、九柱

戯のゲーム最中のいざこざが表わされている。同じくド

イツの木・銅版画家でニュールンベルグで活躍したハン



図12 フランス・ヴァン・ブリュッゲ
「農民の喧嘩」銅版画、15世紀末

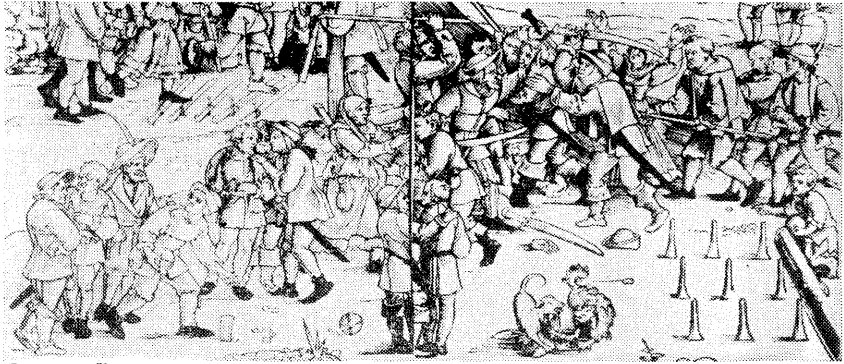


図13 バルテル・ペーハム「九柱戯」(「村の縁日」の部分) 1534年頃, 木版画



図15 「九柱戯」オランダのタイル画
17世紀後半

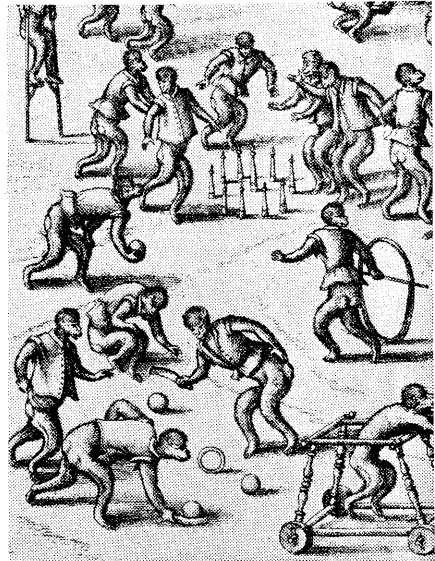


図14' ピーテル・ヴァン・デル・ポルト「九柱戯とボール遊び」(「猿の遊戯」の部分) 銅版画, 1580年頃

ス・ゼーバルト・ペーハムの「村の縁日」(図13)でも、祭日での種々の娯楽(ダンス、刃渡り、駆足)の中に、この遊戯が前景のかなり大きなスペースを割いて画かれている。細長い円錐形のピンを三本ずつ三列に、すなわち計九本立てて、遠くからボールを転がし、ピンを倒すという、今日のボーリングの前身のよ

うなものである。真中のピンを王様と呼び、これを倒すと一番得点になる。なお、一五八〇年頃に制作されたピ―テル・ヴァン・デル・ポルフトの「猿の遊戯」(図14)ではこの九本のピンを円形に並べ、真中に王様のピンを置いてある。この版画は直接、ブリューゲルの「子供の遊戯」に啓蒙されたといわれるが、ポルフトは同一画面に、「骨遊び」をも画いているので、ブリューゲルがなぜ九柱戯を彼の九十近い遊戯の中に入れなかったのか、不明である。なお十七世紀のオランダのタイル画(図15)にも好んでこの遊戯は用いられた。F・M・ペーメは九柱戯 Kegelpiel がドイツの起源と推定し、中古ドイツ語の chagil (すなわち "Prahl" 抗) に溯源すると述べている⁹。実際、一二九〇年頃に書かれたリユーディガー・デル・フロントホーヴェルの「棍棒」という詩にはこうある。

「誰でも

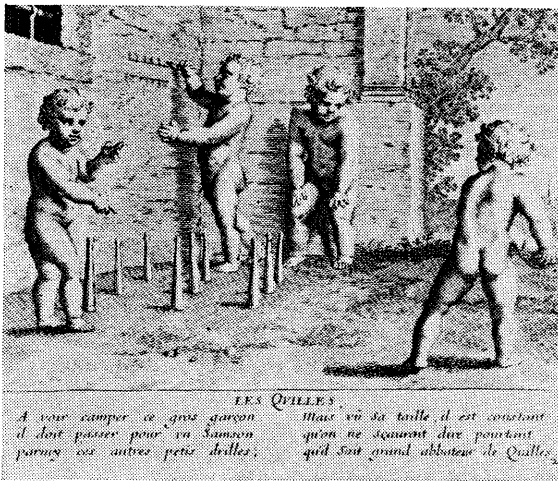
九柱戯をしたい者は

広場に行くべきだ

そこで彼は沢山の計略を見つけるだろう¹⁰」

この詩の中で「計略」für saz=Vorsatz と述べているのは、前の詩で、親を顧りみない子供たちに対する「計略」と関係させているのだろう。

十七世紀のフランドルの詩人ジャック・ステラは、九柱戯についての詩を残している(図16)。



LES QUILLES.
*A voir camper ce gros garçon
 il doit passer pour un Samson
 parmy ces autres petit drolles.*

*Mais vu sa taille il est couchant
 qu'on ne sçait dire pourquoi
 qu'il soit grand abbateu de Quilles.*

図16 クローディン・ブゾネ・ステラ「九柱戯」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より) 銅版画

「この肥った少年が

身構えているのをみると

彼は他の小さな奴らの間では

サムソンとみなされている。

だが背は高くとも

彼が九柱戯のピンの

大打倒者となるかどうか

確かに誰も云えないことだ。^{注11}」

71 ハンドル投げ Het Klinkerspel (図17)

二人の少年がそれぞれ片手に軽い一本の木の棒をもっている。右側の少年がまず棒（それをハンドル Klink, Klinkerd と呼称）を空中に高く投げると、棒の先端をもった左側の少年が、仲間の棒が落ちてくるのを待ってたたき、もう一度棒を空高く飛ばす。

しかしよく見ると、左側の少年は自分の前の穴を守っているようでもある。ゆえにハルトマンIIレンスは、まづ右側の子供が棒をその穴に入れるべく投げるのを、左



図17 ブリュウゲル「ハンドル投げ」（「子供の遊戯」の部分⑩）

る。

ドローストは古いオランダの遊戯に注目しているが、それによると、まず小さな穴の中に両端の尖った十センチから十五センチ位の棒を入れる。その上に短い棒をのせ、下から勢いをつけ、上の棒を空中高くはじき飛ば

側の子供がそれを阻止している、と解釈^{注12}している。もし棒が穴から離れたとき、穴からの距離を計り、棒の長さ分を一点と計算し、一方が百点となったら、ゲームは終りとなる。

す。それを仲間が掴まねばならない。成功すると、掴んだ場所から再び、長い棒のある穴の中に投げ入れなければならない。もし掴みそこねて、棒が地面に落ちてしまったとき、その位置から穴に投げ入れることになる。

確かにこうした遊びはあったであろうが、このブリュゲルの画面では二本の大小の棒が入るほどの大きな穴ではないので、ドローストの説明はここでは該当しないように思われる。ただし、ラブレールの『ガルガンチュア物語』の第二十二章「ガルガンチュアの遊戯」には、「穴入れ」à la truye とか「棒のせ」à la vergette、「棒とばし」à la pyrouete など、このブリュゲルの画面に関連する遊戯が列挙されている。

72 穴の中へ Naar de Putten (図18)

七人の少年たちが縦に一列にあげられた小さな穴を取り囲んでいる。前かがみの一人の少年が左手にボールをもち、穴の中に入れようとしている。ド・マイヤーはこの少年が仲間が邪魔される前に見事にボールを入れたら

得点となる、述べているが、^{注14} どう邪魔するか説明してない。

ハルトマン・II レンス^{注15}によると、どの子供も自分の穴というものを持っている。まずくじで番になった子供が一定の距離からボールを穴の中に転がすか、投げ入れる。三回やって失敗したら他の子供と交代する。穴に入れることができたなら、すぐボールを拾い、他の子供たちにそれをぶつける。子供はすぐ逃げ出さねばならないが、もし体に当てられたら、自分の穴に小石を入れねばならない。投げ手が逆に失敗したら、自分の穴に石を入れることになる。こうして遊び仲間たちは、ある一定の石が穴にたまってしまったら、その遊びは終りとなる。しかし一番の負者は、38の「足蹴りごっこ」と同じ罰である *door de spitsroeden loopen* (二列に並び、鞭をもった仲間の間を走り抜けなければならない。本誌一九八二年五月号参照) を受ける。

この遊戯の歴史はかなり古く、すでに十三世紀後半に活躍したドイツの教訓詩人ヒューゴー・フォン・トリン



図18 ブリュージュル「穴の中へ」(「子供の遊戯」の部分②)

ベルクの『競争者』(一三〇〇年)の

中に、「子供たちが道路に小さな穴

をあけたように、ここに一列にならんでいる」とこの遊

戯らしきもの言及がある。^{注16}

注17
コック・テリリンクはこの遊戯を *Puttekenballen*

(小さな穴の小さなボール)と、ドローストは *Petjeball*

(「ボールの小さな穴」の意味)とか *Negenputten* (九つ

の穴)など、それぞれ、オランダの古い表現を見出して



図19 E. シリマン「穴の中へ」(部分)(J. カッツ「結婚について」1642年より)

いる。とくに「九つの穴」の場合、それぞれ一定の価値をもつが、とくに真中のそれは前述したように、一番重要度が高いのである。さらにドローストはイギリスで *Nineholes* と呼称される遊戯の歴史を紹介した。これは一七八〇年頃に復活したゲームだが、というのも市参議会がロンドン市の内外での九柱戯用のグラウンドや柵を取り壊したからで、その代替用の遊戯として見直されてきたのである。そのため、人々はこの処置に立腹し、この六ボール遊びを、*Bubble the Justice* (泡沫正義)と仇名したのである。

このほか、ドイツでは穴ではなく地面に帽子を置いてその中にボールを入れる遊び *Mützenball* とか *Kappenball* もあるが、カロム(一六二六年)もその中で、

Ter Kuyt-spel (穴遊び) *Balleken in de hoed* (帽子

の中へ小さなボールを)と言及している。^{注19} ヤコブ・カッツ

の『寓意と愛の図像集』(一六二二年)のタイトル・ペー

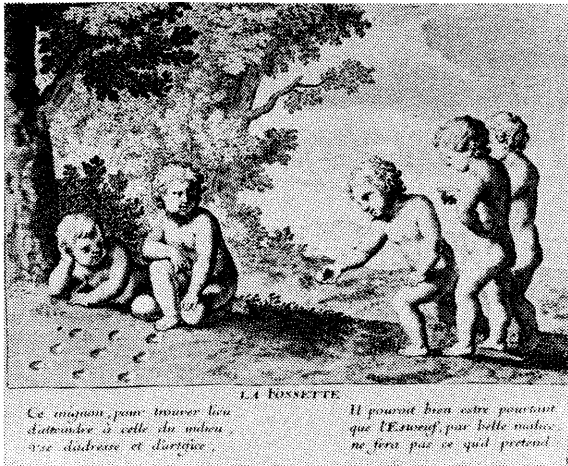


図20 クローディン・ブゾネ・ステラ「九つの穴」
(図16と同じ)

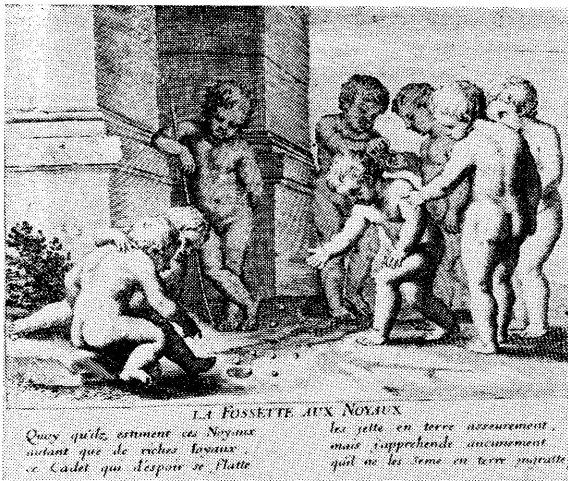


図21 クローディン・ブゾネ・ステラ「種の穴」
(図16と同じ)

ジにも道路で遊んでいる二人の男の子と、それをみている小さな女の子と犬という微笑しい挿画(図19)がある。クローディン・ブゾネ・ステラは樹木の繁る郊外の平地の一角で、五人の子供たちがボール遊びに夢中になっている姿を画いている(図20)。これから投げようとする

子供の真剣な眼差し、後ろで立って彼に指図をする仲間、さらに地面に坐って彼の仕草を見守る二人の子供たちなど。ジャック・ステラの詩「九つの穴」は以下の如くである。

「この可愛い童子は

真中の穴に届く場所を見つけるために
気転と技巧を使う。

けれども布ボールは意地悪く

あの子が思った通りに入らないことも

きつとあるだろう。」^{注20}

他方、ステラは同一の詩集で、手の平に入るほどの大きなボールではなく、小石とか果実の種子などを穴に入れるという類似の遊戯も、「種の穴」と題して謳っている(図21)。

「彼らはなんとこんな種を

高貴な宝石と思っているが

希望に燃えたこの若者は

自信をもって得意気に地面に種を投げる。

しかし、不毛な土地での種蒔きは駄目だ。

私は云いたいのだが。」^{注21}

注1 Jan Puijs, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 92.

注2 *Ibid.*, p. 17.

注3 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspiele 1560*, Wien 1957, p. 41.

注4 本稿の図7、8は Puijs, *op. cit.*, p. 174. による。なお

獸類の骨については明治大学農学部教授友田 仁教授に豚、羊、キリン、ヒラコなどの基節骨の実例をみせていただいた。この教示を得た。

注5 J. Wendel, Amsterdam (1801-1849) 発行の「子供版画」二十番からの銘文。

注6 *Kinderspeck ofte Simnspeelden van de spelen der kinderen*, 発行者 J. A. Calom, Amsterdam 1626.

注7 F. Hartmann en E. Lens, *Héél Job!* Amsterdam 1976, p. 84-85.

注8 Jacob Cats, *Kinder-spiel*, Sint-Omer 1855, pp. 56-61 (reprint).

注9 F. M. Böhm, *Deutsches Kinderlied und Kinderspiel*, Leiden 1897 の書及 Hills, *op. cit.*, p. 45 にある。

注10 Rüdiger der Huthover, *Der Schläger* (ca. 1290), 発行者 F. V. d. Hagen, *Gesamtdruck*, II, 49, 1184 以下。

注11 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint; *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 24.

注12 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 80.

注13 W. P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel voor de Zeventiende Eeuw* (Dissertation), Leiden 1914, p. 91.

注14 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 9.

注15 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 81.

注16 Hugo von Trimberg, *Renner* (1300), 発行者 G. Ehrisman, II, Z. 11, pp. 425 ff.

注17 A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspelen en Kinderlied in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. III, pp. 116-126. Drost, *op. cit.*, p. 61 ff.

注18 Cock en Teirlinck, *op. cit.*, Bd. III, p. 125.

注19 Stella, *op. cit.*, NO. 14.

注20 *Ibid.*, NO. 16. (東京工芸大学)

保育所における大型遊具の遊びの研究

——三歳未満児のための室内大型遊具——

福岡 貞子

上月 素子

はじめに

保育所保育の特性の一つに、3歳未満児保育があげられる。3歳未満児の保育は、その未熟性のために全ての活動を大人に依存し、常に保育者と共に行動することを余儀なくされ、戸外活動の制約を受ける。全身運動の要求を強くもち、目ざめている間中動きまわって遊びたい、3歳未満児保育の大半が室内活動であることを重要視し、「3歳未満児の全身運動・探索活動のための室内大型遊具」の共同研究を始めたのは五年前である。

安全な大型遊具の材料として、ダンボールを選び、大
学での試作、そして、試作遊具の保育現場における実践
によって、予想以上の有効性が認められたことに勇気を
得て、広く保育現場へ普及することを願い製品化を考え
たが、梱包や運賃がコスト高のため、営業ベースにのら
ないことが判明した。

ここに、保育者集団による大型遊具の共同製作の必要
が生じるのである。「保育所における大型遊具の研究」
のうち、今回は、3歳未満児のための大型遊具を中心に
述べることになる。

1 大型遊具の遊びの意義

子どもが健康に育つためには、戸外で全身を使って遊ぶことが大切である。また、全身運動を十分することによって、遊びの充実感が得られ、心身共に安定した状態となる。この全身を使う遊びは、戸外・室内の大型遊具による遊びがそのほとんどを占めている。

この大型遊具の遊びの意義は、次のようにまとめられる。

- ① 全身運動を伴う、自発活動が促される
 - ② いろいろな遊びが創造される
 - ③ 好きな遊びに挑戦する気持が培われる
 - ④ 多人数で遊べるので、友達との関わりが生れる
- など、大型遊具は、乳幼児の望ましい発達を助長するために、不可欠なものである。

この大型遊具にもいろいろな種類があり、戸外と室内、さらに、それぞれ固定式と移動式に分けられ、遊具の目的をもって製作されたものではない、素材遊具（ポ

ンコツカー、鉄道の枕木、電信柱、古タイヤなど）も創造的遊びのために有効な大型遊具となるのである。

2 3歳未満児の運動発達と遊具の関わり

6ヶ月以前の子どもは、周囲の刺激に対して受動的であり、大人に抱かれたり、あやされたりしながら、次第に周囲に対する反応のし方を学んでいくのである。6ヶ月を過ぎると、自分の方から積極的に働きかけるようになる。寝返り・這うなどの移動運動もできるようになる。周囲の事物を探索し、感覚・運動を通して、少しずつ認識していくようになる。このため、それぞれの発達に即した感覚・運動を中心とした遊びが十分行われるように、安全で自発活動が促される環境を整えることは保育者の重要な役割である。

0、1、2歳児のそれぞれの運動発達の特性と全身運動を促す大型遊具の関りは、次のようにまとめられる。

(1) 歩行開始（15ヶ月）の頃まで

自分の身体の部位や、身の回りの用具に強く関心を示

し、いじくる、しゃぶる、動かすなどの探索行動が始まる。とりわけ、歩行開始前の移動運動のなかで、這う・坐る・つかまり立つ・つたい歩く・物を押すなどが、くり返し十分できるような大型遊具（作品A）が求められるが、安定性のある安全な大型遊具はそう多くはない。なかでも、歩行の開始に必要な足腰の筋肉を培うための〈物を押し歩く〉ために適した遊具などは、無いに等しい現状といえよう。

(2) 歩行開始から2歳まで

歩行が開始されると、歩行の習熟を目指して、押す・ひっぱる・のぼる・おろる・またぐ・すべるなどの運動を好んでする。この時期には、戸外・室内どちらでも、全身運動を十分させて、大筋肉を発達させることが大切となる。これらの全身運動には、安定性のある大型遊具は有効な環境となり、作品Aや作品Cのプレイウォールを他の大型遊具を組み合せていろいろな運動をさせる。

(3) 2歳から3歳まで

歩く、走る、跳ぶなどの基本運動の伸びが目立ち、リ

ズミカルな運動を好みよくひとりで踊っている。また、大きなものを力を入れて押す、鉄棒などにぶらさがれる、遊具の急な傾斜をよじ登る、段差のあるところからとびおろるなど、積極的に挑戦しようとする。

この頃は、ひとり遊びを充実させることはもちろんであるが、社会性が芽ばえ、友達を強く求めるようになるので、二人で一緒に遊べる遊具（牛乳パックの椅子やテールブルなど）や、いくつかの遊具を組合せて（作品C）数人の子どもが一緒に全身運動のできる場をつくり、触れ合う機会を多くすることが必要である。

(4) 障害をもつ子どもたちに

障害をもつ子どもといっても、さまざまであるが、何らかの障害によって、発達が足ぶみしている子どもは、3歳未満児の発達のようにと似ている。人間の発達は系統性をもち、歩行に至る移動運動の発達などは、①首がすわる、②寝返り、③這う、④ひとり坐り、⑤つかまり立ち、⑥ひとり歩きという順序性をもっている。2本の足で体重を支えて立ち、歩くためには、まず、首がすわ

り、身体をひねって寝返りができなければ、歩けるようにはならないのである。

運動発達ばかりでなく、0、1、2歳児の保育実践は障害児保育に多くの手掛りを提供している。障害児と遊具のかかわりについても、未満児保育に学び、障害児のための遊具・教具の手作りを積極的に行って、遊びの環境を豊かに用意し、障害児の体験を広げる努力が望まれるであろう。

3 3歳未満児の室内全身運動のための環境づくり

子どもの遊びは、全身を使う運動がそのほとんどであり、戸外活動を充分することによって、心身共に遊びの満足感が得られ、安定することは冒頭に述べた。

しかし、3歳未満児保育においては、その発達特性である、未分化、個人差が大きいなどの理由によって、全ての活動を大人に依存し、全身運動のための戸外活動に大きな制約を受ける。したがって、室内活動にウエイトがおかれ、子どもが遊びの充実感をもつためには、室内

の全身運動のための環境の整備にかかっているといても過言ではない。さらに、保育所保育の特性である、長時間・保育、通年保育などを考えると、3歳未満児のための室内大型遊具のあり方が遊びを左右するキーポイントとなるのである。

〈3歳未満児の室内大型遊具の条件〉

①安全性が高い（適度な重量をもつ安定性と丈夫さ、衝撃を吸収する）

②発達に即して目的活用が可能

③コンバクトに収納、移動可能で場所をとらない

どこの保育所にも、3歳未満児の保育室には大型遊具の一つや二つはあるが、それらの遊具をみると、この三つの条件を備えた遊具はほとんど見当たらない。3歳未満児の室内遊びの充実のために保育現場の「子どもの立場に立つ」遊具の製作が広がり、それに対して、専門家による理論的位置づけがなされ、適切な遊具の開発が望まれる。

最近、保育者による手作り遊具の流行がみられるが、

作品のほとんどは、小型で布や毛糸が用いられている。また、廃材の活用にウエイトを置き、雑な製作の遊具もみられるのは残念である。

4 保育者による大型遊具の製作

子どもを保育するのは保育者の本務である。その保育に必要な環境づくりもまた、保育者の役割の一つともいえよう。先に、述べたとおり、3歳未満児のための、室内大型遊具は、保育者集団による研究・試作が求められるのであるが、多忙な保育者が貴重な時間と労力を使つて行う遊具づくりは、遊具の機能を踏まえた専門的活動でありたいと考える。

〈遊具の機能〉

- 。遊びが引き出される（自発活動）
- 。遊びを創り出す（創造活動）
- 。多目的に利用できる（個人差に対応）
- 。安全性が高い（安定・丈夫・衝撃の吸収）
- 。デザインの美しさ（芸術性）

これらの遊具の機能をふまえ、3歳未満児の室内大型遊具の条件を備えたものとして、我々は後に紹介する、大型ダンボール遊具、牛乳パックの遊具を試作し、保育者集団による製作実践を試みた。

〈ダンボール材の特質〉

ダンボール材は、中が波状のうね（凹凸）になっているので、同じ厚さの他の材料より①軽量である。うねの向きを直交して重ね合せたり、内部に三角形の構造体を組み込むことで②丈夫になる。③暖みのある肌あいで、弾力性に富み④衝撃力を吸収する。他の素材（木材、合成樹脂など）に比して⑤加工が容易である。水には弱い。が、室内の使用には充分耐え、ペイント塗装や布貼りなどの表面加工によって、⑥耐久性が得られる。

〈牛乳パックの特質〉

牛乳パックは、身近にあり、材料の入手が容易である。規格サイズ（1000cc、7×7×24.5cm）であるため、組合せる、つなぐなどの加工がしやすい。合紙（アルミ・紙・ポリエステルなど）を使っており、丈夫で耐久性に

富む。中空のため軽い。そのままでは弱い。二個をさし込んでユニットにする。ダンボール材で補強・仕上げの方法の工夫などによって耐久性が得られる。

これらの特質を生かして、製作された遊具の特徴は、3歳未満児の室内大型遊具の条件を全て備えており、有効性の高い遊具といえるのである。両者を比較すると、ダンボール遊具は相当の重量を有し、安定性に富む。牛乳パックの遊具は、軽くて、扱いやすい。製作が容易である。という長所があげられるが、特性は同時に限界でもある。

保育者集団による本格的な大型遊具製作に際しては、材料の特性を充分理解し、その特性を生かした遊具製作を考えることが大切であり、材料の扱いを誤ると危険な遊具となる恐れもある。

5 大型遊具製作がもたらす保育者集団の高まり

過去5年間の大型遊具製作実践の中で、保育者・学生・母親の三者を比較すると、さすがに保育者の作品は群

を抜いてすばらしい。作業の段どり、要領、スピードはもちろんのこと、頑丈な仕上り、作品の美しさに感嘆する。さらに、一度製作方法を習得すると製作意欲が盛り上がり、保育者でなければ思いつかないアイデアを生かした、真に「子どもの立場に立つ」遊具が考案されるのである。実際に製作している園の実践報告をまとめると、〈遊具製作の意義〉は、次のようになる。

○保育者が、愛情を込めて作った世界に一つしかない大切なもの。

○手作りの暖みのある風合をもつ。

○生活の中の廃材を活用し、安価である。

○生活に必要なものを自分の手で作る文化を伝承する。

これらの一般的意義に加えて

○子どもの発達や要求に合わせて創意工夫して製作する
○自分の製作した遊具に愛着をもち、ものを大切に扱う
生きたモデルとなる。

○苦勞して製作した遊具で遊ぶ子どもの姿が、新たな感動となり、子どもをよく観察し、発達との関連が押さ

えられ子どもを見る目が育つ。

。ダイナミックな共同作業によって、保育者の連帯感が高まり、保育の創造の原動力となる。

保育者集団による、大型遊具製作がエモーションとなり、保育創造の動機づけとなるならば、現場の保育を高めるために大きな役割を果たすことになる。とり組みにあたっては、それぞれの園の保育条件（立地条件・保育課題・職員組織など）を考慮して、計画性をもたせることが大切である。

- 。要点は次のとおりである。園に必要な遊具を検討する
- 。製作チームを編成し、時間と労力を生み出す。
- 。材料を探し、集める。（地域の産業廃材の活用）
- 。とにかく製作を開始することである。

保育者が製作した遊具を子どもに提供してみることに
よって、子どもの遊びに学ぶことが何より大切である。

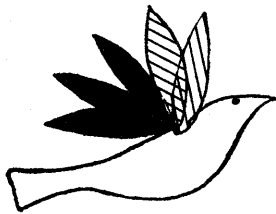
「子どもは遊びの天才である」——保育者の思いつかな

い遊び方を次々に考え出すその姿に、新しい有効性が発見されたり、また、使い方によっては製作に補強の必要が生じたりして、保育者の創意工夫が求められてくるのである。

次にダンボールと牛乳パックで製作した大型遊具の一部を表にして、次頁に紹介する。

関連研究発表

- ・ 日本保育学会第33・34・35回研究大会論文集
- ・ 「発達」7・8・11・12号
- ・ 「保育とカリキュラム」57年10月号

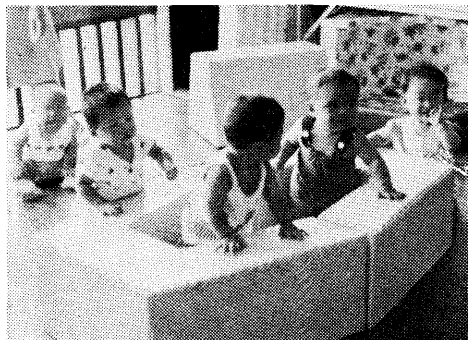


（福岡貞子・四條駿学園女子短期大学
上月素子・兵庫女子短期大学）

6. ダンボールと牛乳パックの大型遊具

	試 作 (数字の単位はセンチ)	特 徴・遊 び 方
A		<p>特 徴 赤・青・黄色に塗装された大・中・小5個の積木は、がっちりとした台形にまとめられる</p> <p>遊 び 方 ロックライミング、トンネルくぐり、プレイハウス、乗物、動物にみたてるなど。</p>
B		<p>特 徴 六角形の台形に窓付というユニークな形。丈夫で安定感がある。</p> <p>遊 び 方 ロケットごっこ、モグラたたきゲーム、隠れ家、積木など。</p>
C		<p>特 徴 伸縮性のあるひもで接続した、4枚または2枚のダンボール板は、変化のある立体が構成できる。</p> <p>遊 び 方 迷路、プレイハウス、滑り台、コーナーついで、トンネルくぐりなど。</p>
D		<p>特 徴 台形状の積木と、半円柱をゴムでつないだバランス台は、構成遊びや運動遊びなど多様である。</p> <p>遊 び 方 積木、シーソー、フィールドアスレチック、じゃんけん遊び、乗物・動物にみたてるなど</p>
E		<p>特 徴 L字型積木の切口を90°と45°に変化させたことで多様な組合せが楽しめる。重ねると三角形、四角形にまとまる。</p> <p>遊 び 方 ままごとの家、乗物、コーナーパネル、台、積木、机と椅子など。</p>

試作遊具A. B. C. Dはダンボールを使用し、仕上げにペイント又は布貼りをしている。Eは牛乳パック (①は48コ ②は42コ) を使用し、布貼り仕上げをしている。



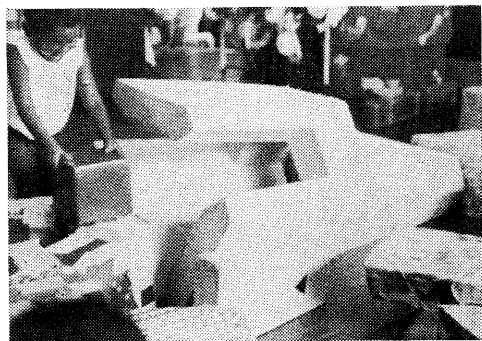
▲試作遊具A

U字型の囲みに入った乳児はつかまり立ちし、外側の乳児は、遊具を叩いて感触を楽しんでいる。



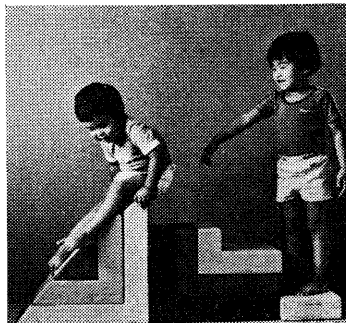
▲試作遊具C

ウレタン積木と組合わせて、変化のある面を構成する。山登り、坂下り、トンネルくぐりを楽しむ。(2歳児)



▲試作遊具B

ロボット型に組立てる。上へのぼって跳び降りても大丈夫。(4歳児)



▲試作遊具E

階段つきのすべり台。トントンのぼってひとすべり。(3歳児)

「子どもたちを送る日」

何たる縁か。こうして親しく、あなたの為には大切な幾とせを、日々にいっしょに楽しみ得たことか。

「教育」。そんなことよりも、あなたを迎える朝な朝なが私の楽しみでした。「あなたの為」。そんなことよりも、あなたといっしょに遊ぶことが私の喜びでした。

ただね、今になって考えて見ると、随分行き届かないことが多かったと、それが、すまないのですよ。けれどね、御免なさいなんて、そんなことは決していいませんよ。私の足りないことを、あなたは何とも思ったりしていないと、それが、しっかり、私に分かっているから——。若しそうでなかったら、こんなに、にこにここと、あなたの修了をお送り出来るものですか。

「いい先生」、そんなこと、どうでもい

いのね。あなたの好きな先生だったんですものね。ほんとに、そうだったんですね。——倉橋惣三「育ての心」より——

三月。卒業の季節。勢一杯小さな翼を広げ、新しい空へと飛び立っていく子どもらの後姿に向けて、保育者がつぶやくのはこんな言葉をおいてない。

然し、それにしても、本当に、「あなたの好きな先生だった」と断言する自信があるだろうか。そこで、その後、そつと、こんな言葉をつぶやきたくなる。

——よろこばれると済まなくなる。礼をいわれると気恥しくなる。うれしさと目出度さに上気させられるような、三月末の賑やかさと、はなやかさの後に、子どもには知らせずに、そつと独りて詫びたい心が残る。—— 同著「詫びる心」より引用——

(H)

幼児の教育 第八十二巻 第三号

三月号 ⑦

定価三〇〇円

昭和五十八年 二月二十五日 印刷

昭和五十八年 三月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼

発行人 津 守 真

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

●本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中

幼児を のほす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

微妙で大切な保育のコンセプトを、がっちり読みとろう。子どもたちに豊かな保育と心をくだいておられる先生や、子どもがよくわからない、きつかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- ① 保育の視点—ここがポイント 海 卓子・著
- ② 指導計画—ここがポイント 高杉自子・著
- ③ 絵画の指導—ここがポイント 林 健造・著
- ④ 音楽の指導—ここがポイント 早川史郎・著
- ⑤ 体育の指導—ここがポイント 三宅邦夫・著
- ⑥ 自然の指導—ここがポイント 小山孝子・著
- ⑦ ことばの指導—ここがポイント 阿部明子・著
- ⑧ ごっこ遊び—ここがポイント 笠間典子・著
- ⑨ 園行事—ここがポイント 仲田あつ子・著
- ⑩ 母 親 対 応—ここがポイント 本吉圓子・著

Ｂ判・セットケース入り・平均208頁・セット定価9,600円

子どもの遊び(全6巻)

● 全国学校図書館協議会選定図書

0歳から3歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ
本吉圓子 田中文字子 著

3歳から6歳(3巻セット)

本吉圓子 前 典子 笠間典美
田中文字子 矢作邦子 著

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

セットケース入り・セット定価 各3,300円

フレーベル館の8大月刊誌

58年度は、内容がさらに充実しました。

① - 情操

増頁しました!!

キンダーブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めめます。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

② - 観察

キンダーブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいのお観察絵本です。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

しぜん-キンダーブック③

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 月300円

キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、“夢とゆとり”が生まれるよう配慮されています。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

キンダー

おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返して読んで楽しめます。

(上製本) 団体購読価 月300円

たのしいがくしゅう

おおぞら

子どもの知的欲求に応えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

(総合絵雑誌) 団体購読価 月300円

ころころえほん

園生活で初めてふれる、2~3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

保育専科

増頁しました!!

-今月のカリキュラム-

先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館